

ISSN 1881-0004

叢智の杜

第6号



『環海異聞』(写本)より「氷山図」

宮城県図書館

【報告】

宮城県図書館での職場体験学習	大内 ゆき江	2
図書館における職場体験学習について	遠 藤 滋	3
宮城県図書館見学	中田理恵子	5
図書委員研修会実施報告	佐々木立子	6
叡智を伝える～宮城県図書館の見学を通して～	小野寺奈絵	7
生徒図書委員の研修（宮城県図書館見学）実施報告	後 藤 和 江	9
複製資料展を実施すること―過去5年間の資料展を 通して	高橋ひろみ	13
宮城県図書館複製資料による「国宝源氏物語絵巻展 示会」	藤 崎 浩 司	17
文化祭展示を通して得たもの	伊 藤 由 美	18
子どもの本移動展示会活用報告	鈴木やす子	23
平成20年度子どもの本移動展示会を開催して	佐々木 荘一	24
川崎町公民館図書室事業報告	須 賀 聖 子	26
企画展「はっぴい さんぽう―和算の世界へようこ そ！―」を終えて	沼 田 幸 子	28
「絵本のお医者さん」開業記	佐藤あづみ	30

【実践】

目で見るみやぎ～県政ニュースを振り返る～	只 野 義 広	32
江戸城内の将軍家図書館―紅葉山文庫と書物奉行	大和田 順子	35
県民大学「折本について」報告	曾 根 晃	40
叡智の源流をたずねて	内馬場みち子	44
時代に睨まれた本たち―もう一つの貴重資料―報告 「子どもの本展示会」について	尾 島 恵	52
図書館親子ツアー実施報告	洞 口 薫 子	54
仙台藩校養賢堂の和算書と洋学書	田 代 恭 子	57
―平成20年度特別展事業報告―	熊 谷 慎 一 郎	59
図書館における博物館型展示の実施について	日 野 文 都	77

宮城県図書館での職場体験学習

仙台市立将監中学校 教諭 大内 ゆき江

1 はじめに

仙台市では、人とのかかわりを大切にしている中で、生徒の勤労観・職業観や自立の力をはぐくみ、確かな学力の向上を図るための「自分づくり教育」を推進している。そしてその活動の中核に複数日にわたる職場体験的活動を置き、その拡充を図っている。本校でもこの「自分づくり教育」の重要性を学校として共通理解し、昨年度から職場体験的学習を取り入れ、3日間の職場体験活動を実施している。

2 本校の取り組み

本校では今回の「職場体験学習」のねらいを次のように設定した。

仕事を体験し実際的な知識や技術・技能に触れることを通し、また、働く人々やその周囲の様々な人々と直接接することを通して

- ① 働くことや学ぶことの意義を理解し、働くことが生きがいや自己実現につながることを実感する機会とする。
- ② 主体的な進路を選択・決定する態度や意志・意欲を培う機会とする。
- ③ 様々な人々とのかかわりの中で生きるということの大切さを感得する機会とする。

今年度、11月19日から21日までの3日間の実施に際し、54の事業所の協力を得ることができた。2学年234名の生徒は2～6名の少人数に分かれ各事業所での仕事を体験した。

3 宮城県図書館での体験活動

仙台市教育委員会の調整により、宮城県図書館で場をご提供いただき、3名の女子生徒が体験活動を行った。



体験活動は、生徒にとっては緊張のうちに始まったようである。担当の方の指示に従って本の整理から始まり、カウンターでの貸し出し業務、本やCDの整理など、業務の一端を担わせていただいた。その過程で図書館業務について知り、理解を深めることができた。また、利用者と直接触れ合い、コミュニケーションの大切さや難しさを改めて体得することができたよう

である。

生徒の体験レポートからは、

- ・私が一番楽しかったことは、カウンターでの貸し出しだ。利用者みなさんに感謝されることがとてもうれしかった。
- ・配架の作業は分野ごとに分類することがたいへんだった。図書館の人たちの苦労がわかった。

など、図書館での仕事を通して「学び」があったことがわかる。

4 宮城県図書館での体験活動を終えて

宮城県図書館での体験活動を通して、生徒たちは働くことの大変さを体感することができた。仕事を行うことは、つらさに打ち勝つ強い意志が必要であることなど、多くのことを学んだようである。中でも図書館でのご指導やご助言な

どを通して、体験活動を支えてくださる方々の温かい人柄に触れたこと、業務を通して利用者の方々から「ありがとう」と言われ、働くことで人々から感謝されることの喜びを知ることができたことは大きな成果であったと思う。これからの生き方を考える上でのひとつの指針となるだろうと思う。

また、宮城県図書館は本校から比較的近距離にあり、休日や長期休業などに利用している生徒も多い。身近な場所での体験活動は、図書館業務を理解することの他にも、地域の中で図書館が果たす役割に目を向ける機会ともなったことはたいへん有意義であった。

最後に今回、体験の場を提供下さり、ご尽力下さった宮城県図書館の皆様に深く感謝申し上げます。

(おおうち・ゆきえ)

図書館における職場体験学習について

富谷町立富谷第二中学校 教諭 遠藤 滋

1 はじめに

本校は、富谷町の南西部に位置し、国道4号線沿いの3つの団地(鷹乃杜・あけの平・とちの木)から成っている。最近は、大清水・上桜木両団地の造成・宅地分譲が進み、生徒数の増加が見込まれている。

2 総合学習について

本校では各学年とも総合学習のテーマを設定

し、地域に出て各事業所の体験やそこで働いている方々取材したり、学校に社会人を招いて講師としてその体験を聞いたりして、自身が選んだ課題の解決学習に取り組んでいる。第2学年では、近隣の事業所に協力を依頼し、体験的な活動である「職場体験学習」を行っている。

3 職場体験学習について

社会と自分の関わりを自らの生活の中でとら

え直し、社会的な生活習慣を身に付けさせることや実際に職場を訪問し、仕事を体験することにより進路への見通しを持たせることを目的に、第2学年において2日間連続の日程で実施している。

訪問時期は、年度によって多少の移動はあるが、今年度は7月3・4日の2日間に実施した。訪問先は、過年度に実施した近隣事業所を中心に、教師側から業種等別に生徒へ提示をして、希望をとった。その希望をもとに該当する事業所に、協力依頼と受け入れ可能人数等の確認を行い、生徒の人数調整後、訪問先事業所等を決定した。

宮城県図書館は、休日等を中心に利用している生徒も多く、当初5名を超える希望があったが、調整の結果3名に落ち着いた。



4 宮城県図書館での体験学習について

(1) 実習の様子

生徒たちは主に配架・カウンターでの貸し出し返却・(書籍を紹介するための)ラベル作りなどの活動を体験した。

配架作業では、ラベルに従って所定の場所に分類する作業を行ったのだが、その分類する場所がなかなか把握できず苦勞をしていた。また、中腰の姿勢を保つことが多かったせいか、つらそうな表情なども見せていた。

カウンター業務では、緊張した面持ちで利用者に対応していたが、職員の方々に付き添っていただき、落ち着いて業務をこなしていた。

(2) 生徒の感想から

生徒たちの共通した感想は、思った以上に図書館業務は精神的にも体力的にも大変だ、ということである。それと同時に職員の方々に対して、この大変な仕事を続けているという尊敬の念と、仕事の合間に自分たちを世話していただいたという感謝の思いも生まれたようである。

学校の中だけでは得難い貴重な体験をすることができ、教師側が意図する以上のものを生徒たちは感じ取ってくれたようである。今後の進路選択等にも大いに生かしてくれるものと考えている。

(えんどう・しげる)

宮城県図書館見学

宮城県古川高等学校 司書 中田 理恵子

本校図書委員会では8月8日に研修として、宮城県図書館の見学と近隣書店での買い出しを行いました。

はじめに古川高校図書委員の活動を紹介します。普段は当番が毎週月曜から金曜まで、昼休みと放課後に本の貸出返却、バーコード登録した本のラベルの張り替え等をしています。他には、おすすめ図書の紹介等を掲載した「図書館便り」の作成を行っています。

当日の宮城県図書館の見学については、係の方の案内で、図書館の成り立ちや各部屋の見学をしました。初めて来た生徒は館内や開架スペースの広さ、蔵書数の多さに驚いたようです。

以下は生徒の感想を紹介します。

〇県図書館というと、古くて堅苦しく面白くもないとばかり思っていました。ところが、実際行ってみると意外なことに中は清潔で新しく、最近の本や雑誌、常設展示などがあり、思ったより楽しむことができました。また、図書館に来るのが困難な人のための郵送による貸出し、目の不自由な人のための音訳サービスもあり、様々な人が図書館や本を楽しむことができることを知りました。この研修に参加して、県図書館で様々な人が本を楽しんでいるように、

他の場所でもこのようなサービスが進めばいいのにと感じました。自分も何かできるように努力していきたいです。(1年)

〇県で一番大きい図書館には数年前行ったことがありましたが、今回再び訪れてみると前とは違う好奇心がわいてきました。本が多いので、昔読んだ思い出の本や感動した本を探したりして、じっくり見て歩きたかったのですが時間が無くてまわりきれませんでした。いまは若者が本を読む機会が減少していると言われていますが、絵本や児童書のコーナーではたくさんの子供が熱心に本を選んでいる光景がほほえましかったです。また、ボランティアの方々が本の整理などを行っているようで、見返りがなくても本やみんなのために働く姿は格好いいなと思います。私も司書などの仕事に興味を持ちました。家の近所にも図書館はあるのですが、家族でまた県図書館に行こうと思います。今回は楽しい研修をありがとうございました。(2年)

(なかた・りえこ)

図書委員研修会実施報告

宮城県一迫商業高等学校 学校司書 佐々木 立子

1 はじめに

本校では毎年、図書委員による図書購入を実施してきた。しかし職員会議で提案した際に、インターネットでも本が購入できる時代に、店頭で購入することに意味があるのか？との意見があり、この行事の在り方を見直すこととなった。

まず、インターネットや携帯電話を手放せない現代の高校生にとって、直に物に触れ選ぶことは重要であると考えた。そして、図書委員としての自覚をより促すため、研修会という形式に変更して宮城県図書館の見学を計画した。

2 研修会の概要

① 目的

図書委員としての自覚を促すために研修の機会を与え、あわせて生徒自身に直接図書を選定させることにより図書館を開かれたものにする一助とする。

② 実施日

平成 20 年 7 月 30 日（夏季休業中）

③ 内容

『宮城県図書館見学』

- ・ 宮城県図書館概要説明

- ・ 展示室企画展の見学
- ・ カウンター裏の見学
- ・ 館内見学

『書店での図書選定』

④ 参加生徒

図書委員・18 名

県図書館では、一般の来館者が入ることが出来ないカウンター裏や、展示室で開催中だった「きらめく叡智と美のしづく展」を見学させていただいた。

生徒達にはカウンター裏の見学が特に印象的だったようだ。歩いて歩いても途切れることのない閉架書架、図書館で 1 番重い 20kg の本を 3 人がかりで持ち、電動書架を実際に動かさせてもらうなど、貴重な体験をさせていただき、興奮気味の様子だった。

この時すでに 10 月に行われる文化祭で『坤輿万国全図』を借用しての展示会を予定していた。研修会で地図を間近で見ると解説を聞くことができ、具体的なイメージがふくらんだようである。

3 文化祭での企画展

はじめは『坤輿万国全図』の一般公開のみ

を予定していたが、ただ展示しただけでは来校者の方々に地図の重要さとすばらしさを伝えきれないと感じた。そこで「きらめく叡智と美のしづく展」を見学し感動を覚えた生徒達が、彼らの目線で感じ取ったことを研究し発表することにした。日本史の教諭と連携し、日本史の授業を選択している図書委員を中心に、以下の研究発表を行った。

- ・『坤輿万国全図』の成立・内容
- ・『坤輿万国全図』が作成された頃（1602年）の世界の出来事
- ・伊能忠敬の生涯と日本沿海輿地図



『坤輿万国全図』の成立・内容の説明文は、添付されているものはあえて使用せず、百科

事典等を調べて作成した。小・中学生の来校者も多いため、読みやすいように難しい言葉をわかりやすい表現に代え、重要な部分は色を変えるなどの工夫をした。

伊能忠敬の研究発表は、他国の文化だけでなく、日本にもすぐれた地図を作成した人物がいたことを知ってもらうために行った。

4 最後に

内向的な生徒の多い図書委員会で、積極的にアイデアを出し合い研究発表を成功に導くことが出来た事は、研修会の効果であることは言うまでもない。

ほとんどの生徒が今回初めての宮城県図書館訪問だった。彼らの受けた感動の大きさを間近で見て、本校のような郡部の学校の生徒にとって宮城県図書館のようなすばらしい施設での体験学習は、得るものがより大きいと考えた。

来年以降もぜひ、図書委員研修会を続けていきたい。

（ささき・りゅうこ）

叡智を伝える～宮城県図書館の見学を通して～

宮城県志津川高等学校 学校司書 小野寺 奈絵

1 はじめに

志津川高校では、毎年夏季休業期間を利用し

て図書委員研修会を実施している。研修会の内容としては、仙台市内の大型書店での図書委員

による選書活動と宮城県図書館の見学（隔年実施）の2つである。

宮城県図書館の叡智の杜づくり事業の一環として展開されている複製資料の貸出事業に以前から関心を持ちつつも、私自身その資料を目にしたことがないという不安から、なかなか実施にこぎ出せずにはいた。そんなある日、宮城県図書館のホームページを閲覧していると、「きらめく叡智と美のしずく展」という文字が目に入った。詳細を見てみると、期間中、県図書館所蔵の貴重資料を多数展示しているという。幸運にも、予定していた本校の図書委員研修会の当日もその開催期間中であることがわかった。図書委員研修会を最も待ちわびていたのは、間違いなくこの私であった。

2 「きらめく叡智と美のしずく展」

7月29日の研修会当日、「きらめく叡智と美のしずく展」に足を踏み入れた我々は、一同に声を失った。複製資料とはいえ、その貴重資料の存在感は圧倒的であった。中でも目をひいたのが『坤輿万国全図』である。その大きさと美しさ、そして豊富な情報量には目を見張るものがあった。生徒たちも、教科書でしか見たことのない資料が今、自分たちの目前に悠然と佇んでいるという事実に、感激を露わにしていた。

また、本校の図書委員の構成は美術部員の占める割合が非常に高い。そのためか、生徒たちは『禽譜』や『魚蟲譜』といった図鑑の類にひととき興味を持ったようで、色の鮮やかさや、写真と比較しても遜色ないその精巧さに見とれ

ていた。

3 館内施設の見学

一昨年と同様に図書委員研修会において県図書館を訪れたが、その際には日程の都合上、短時間しか滞在時間が設けられず、駆け足での見学となってしまった。しかし、係の方から丁寧な解説を交えながら館内をご案内頂き、閉架書庫の中も見学することができた。普段は味わうことのできない貴重な体験に、生徒たちは大変満足していた。

今回は基本的に個人ごとの自由見学となったが、初めて県図書館を訪れた生徒にとっては、学校図書館や町の公共図書館とは比べものにならない規模の蔵書の数や、整備の行き届いた館内の施設を見学することは十分に価値のあるものだったように思われる。

4 おわりに

私が学校司書として志津川高校に赴任した最初の年、高図研の総会において、宮城県図書館職員の内馬場みち子氏の講話を拝聴した。それまで考えたこともなかった、先人達によって築き上げられた歴史と、その者たちが馳せた想いに触れ、胸が熱くなったのを今でも覚えている。

わずかながら、今回の研修会で「22世紀を牽引する叡智の杜づくり」事業に触れることができた。私自身も実際に資料を目にすることができ、今までは漠然としたイメージでしかなかったものが具体的なものとなり、ぜひ他の生徒たちにも見せたいという思いが強まった。

このような取り組みから、生徒たちがそれぞれの作品の背景と歴史を感じ、その作品に込められた願いや想いを受け取ってくれることこそ

が、古の叡智を現代へと伝えるきっかけとなるのではないだろうか。

(おのでら・なえ)

生徒図書委員の研修（宮城県図書館見学）実施報告

宮城県佐沼高等学校 学校司書 後藤 和江

1 はじめに

本校では、年に1回図書委員研修会を実施している。内容は施設見学1ヶ所と図書の取次ぎ会社トーハンでの本の直接選定である。

“本”という文化を扱う図書委員たちが、日常ではあまり行く機会がない施設を見学することで、よりアカデミックな雰囲気を感じとり、その後の委員会活動にも誇りを持って取り組んでほしいというねらいから実施している。

貸し切りバスでの移動はちょっとした遠足気分でもあり、生徒たちも毎年楽しみにしている行事である。

実施時期は5月下旬の土曜日（土曜課外のない週）となっており、気候的にも恵まれた時期といえる。本来図書委員は36名いるのだが、この行事への参加は20名前後といったところか。ちょうどこの時期の図書委員は委員会読書会を実施するほか、クラスからの購入希望図書の取りまとめを行うなど、けっこう仕事が煩雑で忙しい。しかも部活動でも活躍している委員が多いため、なかなかこういった研修に参加できない生徒が出てきている現状がある。

2 見学場所について

施設見学は、公共図書館・大学図書館・他の文化施設のなかから選ぶのが恒例になっているが、今年は宮城県図書館を選んだ。宮城県人でありながら、地方に暮らす高校生にとって、宮城県図書館は残念ながらあまり身近な存在とはいえない。本校の生徒も例外ではなく、入学時に1年生対象に実施している図書館オリエンテーションの中で、「宮城県図書館に行ったことのある人？」と質問しても、手を挙げる生徒は稀である。そんな生徒たちにまずは県図書館の建物そのものを見てもらいたいという希望もあったし、前任校も含めて過去に何度か図書委員を連れて行った経験からも、県図書館ならば十分に生徒たちも興味・関心を持って見学してくれるだろうという確信があった。

3 当日のスケジュール

“図書館見学”と“本の購入”といういわば2つの行事を1日で済ませようという欲張りなプランのため、毎年見学場所での滞在時間が2時

間ほどしかとれない。そのため見学のスタイルとしては、館内利用についてのビデオを15分程度視聴したあと、職員に館内を案内していただき、その後自由見学というパターンが多い。生徒のほとんどが初めての県図書館ということもあり、限られた時間での見学ということではきわめて一般的な見学のスタイルといえよう。

過去には地形広場“ことばのうみ”から外に出て、遊歩道“書見の道”を散策しながら説明を受けたということもあった。のんびりとしてとても風雅なひとときだったと記憶している。

自由見学だけでもいいのではという考えもあるだろうが、“図書委員研修”という位置づけだけに専門職員からの説明は不可欠だと考えている。短時間であっても満足できる見学をどのようにするか、担当者との数回の打ち合わせの結果、今年の見学プランは次のように決まった。

実施日 5月31日(土) 10:00~12:00

ロビーにて簡単な説明(10分)

特別展示の案内・見学(15分)

閉架書庫の見学(45分)

新聞マイクロフィルム閲覧のデモンストラーション(20分)

館内自由見学(30分)

県図書館は広く、1階の“音と映像のフロア”や2階の“子ども図書室”、そして3階の“みやぎ資料室”などゆっくり見せてあげたい場所も多いのだが、それらは自由見学の時間に個々に興味のある場所をまわってもらうことにした。

(しかし実際には自由見学の時間は全然足りず、しかも初めての建物に迷う生徒も多く、思うよ

うに見られなかったという声も多かった。)

見学日当日が「きらめく叡智と美のしづく展Ⅶ」の最終日ということもあり、いつもは自由見学にしてしまう展示室見学をあえて職員の説明付きでお願いした。ともすれば素通りしがちな展示室だが、常設展示や特別展示などをゆっくり見ることができ大変有意義だった。(自由見学時に再び展示室に行き、近代の美しい装丁の本について説明を受けていた生徒たちもいる。)

最近では4階の閉架式書庫を特別に見せていただけるようになったこともあり、見学プランには必ず入れるようにしている。一般書架や展示室はその後個人で利用する時にも見ることができるが、閉架書庫は団体見学のこの機会にしか見ることができないからだ。毎度のことながら、4階のフロアすべてが本に埋め尽くされた光景には圧倒され、本好きの生徒たちは一様に興奮する。「ここに住みたい!!」と叫ぶ生徒も一人や二人ではない。



電動式書架に見入る生徒たち

電動で動く大量の書架に歓声をあげ、整然と整理された図書資料と、階下の受付カウンター

から届けられる様々な資料を求めてフロアを縦横に走り回る職員の働きぶりに驚く生徒たち。学校図書館との圧倒的な規模の違いをまざまざと感じているのだろう。見学の途中、1人では抱えられないほど大きな本を特別に見せていただき感嘆の声をあげ、雑誌保存コーナーで種類ごとに保存された大量の雑誌を見て感心しているうちに、時間はあっという間に過ぎていく。

4 見学を終えて

見学日は土曜日のため一般の利用者も多く、受け入れる側では大変だったかもしれない。

今年は初めて新聞のマイクロフィルム検索の体験を取り入れたこともあり、その分複数の職員の方々に協力をいただいた。快く引き受けていただき感謝している。事前に何名かに自分の誕生日の新聞記事を見ようということと呼びかけていたものだが、20名の参加者全員が機械に触れられるわけではないので、機会を取り囲んでただボーっと見るだけで終わってしまった生徒も多く、それは反省すべき点だった。

限られた見学時間を有効に活用するために、一部を班別行動にするなど、今後何らかの工夫が必要かもしれない。

5 生徒たちの感想

県図書館見学を終えての生徒たちの感想は、一様に満足したというものが多かった。

以下、生徒に書かせた感想の一部を紹介する。

宮城県図書館は想像よりもずっと大きな建

物でした。本の量もそれ以外の情報の量もとてもなかったです。建物自体や内装のデザインも素敵でした。火が発生した場合はスプリンクラーではなくガスが発生して消火するということには驚かされました。(3年女子)

最初に見学した展示室では、たくさんの貴重書や昔の人が描いた動物の絵が展示されており、とても興味をもちました。絵は、作者がその動物に関する情報があまりない中で、想像も交えながら描いたものだったので面白かったです。

その後図書館での仕事の話聞き、本を運ぶ時に専用のエレベーターを使うということを初めて知りました。今まではたくさんの本を運んでいくときはどうしているのかと疑問に思っていました。これなら手間が省けるなど感心しました。でも、もしエレベーターで運ぶ途中で突っかかりたりしたらどうするのか少し疑問でした。図書館で一番驚いたのは、やっぱり本の量の多さです。図書館に勤めている職員の人たちは本当に本が好きでこの仕事をしているのだ、すごいなあと思いました。(2年女子)

僕の将来なつてみたい職業の一つに司書があり興味がありました。しかし実際に仕事を見してみると、本を運んだり蔵書の整理をしたりと体力的なものがあることがわかり、実際に職場に行かないとわからないことがわかり勉強になりました。また大きい図書館になると、博物館のように古い本が展示してありびっくりしました。他にもマイクロフィルムなど実際にやって

みたいとも思いましたが、時間がなくて他の人が操作しているのを見るだけで終わってしまい残念でした。(1年男子)



マイクロフィルム検索にも挑戦!

栗原市立図書館にしか行ったことがなかったもので、改めて県立図書館の広さや本の徹底した管理、設備の充実には本当に驚きました。あそこにあった全ての本の詳細がパソコンに入っていて予約までできるというのはすごいことだと思いました。4階の書庫の管理や設備も徹底されていて、中でも火災が起きた時の消火方法には疑問を持っていた分、感心しました。(1年女子)

宮城県図書館は今まで一度も行ったことがなかったのでとても楽しみにしていました。古い感じのイメージがあったのですが、とても近代的な建物で外見も中もすごくきれいで驚きました。館内には本当にたくさんの本があり、しかもジャンルごとにわかりやすく整理されていて利用する機会がある時はぜひ利用したいと思いました。また20kgも重さがある本や、電動閉架書架は初めて見て本当にびっくりしたし、貴重な経験となりました。(2年女子)

今回図書委員研修会に参加して、とても新鮮な体験ができました。一番大きいといわれている地図をみることも研修だからこそだと思ふし、自由見学のとき、職員の方に製本の方法を教えていただいたりできたのもこの機会ならではのと思います。(3年女子)

ただでさえ凄い蔵書があるのに、裏側にもおなじくらい(あるいはもっと)たくさんの蔵書があったので凄いなあ・・・と思いました。しかも、その数の蔵書から本を探し出す人がまた凄い。日に何往復もするというので大変だなあと思いました。重い本というのを見せて貰い、図書館の仕事も体力が必要だと説明されたのに納得しました。図書館の造りも独特で(京都駅をデザインした人と同じらしい)、こども図書館も宇宙船みたいで何か良かったです。

「住みつけてえ」と思いました。(2年女子)

県立図書館は見るのも入るのも初めてで、その大きさに驚きました。展示なども多く、図書館自体がそもそも初めての私には全てが興味深い刺激的な場所だったと思います。新しい発見もたくさんありました。自由時間になり、本を見ていてもあの広さなので全然見られなかったのがとても残念でした。友だちが「図書館では30分も1分に感じる」と言っていたのですが、全くその通りでした。今度は個人的にも行ってみたいと思います。(1年女子)

かつては多くの学校でこのような図書委員

研修が行なわれていたものだが、近頃は校内の諸事情もあり縮小されていると聞く。本当に残念でならない。生徒たちの素直な感想からはマイナスイメージは何も感じられない。こういう機会がなければ県図書館に足を運ぶこともない地方の高校生にとって、確実に良い経験になっ

たことは間違いない。瑞々しい感性を持つこの時期、生徒たちには様々な見聞の機会が与えられるべきだ。それがその後の生涯学習につながっていくのだから。

(ごとう・かずえ)

複製資料展を実施すること―過去5年間の資料展を通して―

宮城県第二女子高等学校 学校司書 高橋 ひろみ

1 はじめに

宮城県第二女子高等学校（以下、二女高とする。）では5年前から毎夏、宮城県図書館（以下、県図書館とする。）複製資料貸出事業を利用し展示を実施している。

過去5年間の展示の実施状況から感想や考えさせられたことを記述する。

2 目的

宮城県図書館所蔵の文化財複製資料を展示し、二女高図書館所蔵の関係資料を展示することで、日本の歴史や文化への興味を喚起し、学習の一助とする。また、学校開放週間にあわせて地域の人々にも公開する。

3 過去5年間の展示

平成16年度 古典への誘い

「日本古典文学の和綴じ本・絵巻・納経等」

平成17年度 文化財への誘い

『^{こんよばんこくぜんず}坤輿万国全図』『^{きんぶ}禽譜』

平成18年度 文化財への誘い

「写楽」「歌麿」

平成19年度 文化財への誘い

「東海道五十三次」「鳥獣戯画」

平成20年度 文化財への誘い

『^{かんかいいぶん}環海異聞』

はじめて世界一周した日本人



平成16年度
古典への誘い
資料を手にする
生徒の様子

二女高では、複製資料展のほか、学校行事・季節・時事問題に合わせたミニ展示を行っているが、今回は県図書館の複製資料展のみ取り上げる。

4 実施時期と展示会場

時期は中旬の学校開放週間とオープンスクールに実施している。

これには、3つの理由がある。

① 展示を行うことで来校者に図書館を訪れてもらい、二女高の図書館の様子（雰囲気、蔵書構成、生徒の様子）を知ってもらうこと。

学校開放週間と面談週間が重なるため、多くの保護者が学校を訪れる。保護者以外にも二女高に興味関心を持っている方や近隣の方、卒業生などが来校し、図書館見学のきっかけとなっている。展示を見るほかに、図書館の雰囲気、蔵書構成、生徒たちの日常生活を知る機会にもなっている。

② 図書館を利用している生徒が、無意識に文化財に触れることができること。

学校開放週間は、午前授業で午後は三者面談になる。午後は多くの生徒が勉強の場として図書館を利用する。また、夏季休業前特別貸出期間なので、入館者が増える。勉強の合間や、本を借りに来た生徒たちが、文化財資料に触れるきっかけになっている。

③ 複製資料の管理や説明がしやすいこと。

複製資料を借りるときに、県図書館から厳しい取扱条件をつけられることはないが、やはり貸借物であり、県の財産であること、その他二女高の関係資料の展示を行っていることから、管理には気を配っている。また図書館で実施することで来校者や生徒への説明がしやすくなっている。

5 準備

準備には図書部員や図書委員、美術部、ボランティアの生徒が携わっている。

① 広報

i ポスター

美術部、またはボランティアの生徒に展示についてのポスターの作成を依頼。校内にのみ掲示。



平成17年度校内掲示用ポスター
絵は美術部の生徒・題字等は図書部で作成

ii ライブラリー（図書館校内広報誌）

校内で作製・印刷・全校生徒職員へ配布

iii 学校開放週間ならびにオープンスクールの案内に掲載。

② 掲示用説明

キャプションや説明資料があれば複製資料と共に県図書館から借りる。その他に補助資料として表、図を作成する。作成のため、多くの資料を読み、事前に学習する。キャプションや説明冊子、その他の資料を作る際に大いに役立っている。

③ パンフレットの作製

ポスターや掲示用説明を利用し、パンフレットを作製。全教職員、来館者へ配布。

④ アンケート作製

見学後のアンケート。(自由回答)

- ⑤ 展示物配置
- ⑥ 渉外・記録

6 見学者の感想、反応等

① 平成 16 年度 古典への誘い

「日本古典文学の和綴じ本・絵巻・納経等」

平成 16 年 7 月 13 日付け河北新報に展示についての記事が掲載され、保護者や一般市民が多数来校した。生徒たちは、複製とはいえ、貴重な資料を目にすることができ、大いに刺激を受けた。来校者からも、「すばらしい」「もっと行ってほしい」等の感想が多かった。絵巻物、色刷り資料に人気があった。

② 平成 17 年度 文化財への誘い

『坤輿万国全図』『禽譜』

前年度が古典文学系だったので、視覚に訴えるものにした。『坤輿万国全図』は想像していたより大きく、見学者たちは立ち止まって隅々まで見ていた。現在の大陸の形との違い、たくさんの奇妙な地名に驚いていた。1600 年当時の世界の中の日本の様子が分かり、良かったという感想が寄せられた。『禽譜』についてはその細やかさ、鮮やかさに感心させられた。

③ 平成 18 年度 文化財への誘い

「写楽」「歌麿」

浮世絵なので、生徒が敬遠するのではないかと不安であったが、浮世絵の歴史、構図の大胆さ、彫り・摺りの技術の高さ、手

作業のすばらしさに感嘆していた。アンケートには、めったに見る機会がないので良かった。二女高で作成した浮世絵の製作過程を説明した資料がとても良かったという感想が多かった。

④ 平成 19 年度 文化財への誘い

「東海道五十三次」「鳥獣戯画」

「鳥獣戯画」を最初から最後まで見る機会はないので、社会科の教員が授業で利用していた。

「東海道五十三次」では、当時の旅支度、行程表、当時の様子と今の様子を比較したコーナーが好評を博した。

⑤ 平成 20 年度 文化財への誘い

『環海異聞』

江戸時代の漂流民としては、幕末に活躍したジョン万次郎、『おろしや国酔夢譚』の大黒屋光太夫、ゴローニン事件や『菜の花の沖』に登場する高田屋嘉兵衛のことを知っている人は多いが、石巻・塩釜の水主が世界一周したことは知っている人は少なく、展示内容にピンと来なかったようである。が、パネルや説明から、帰国を断念した（断念せざるを得なかった）人々の思い、漂流民をとりまく政治的思惑に振り回され、異国の風物を目の当たりにした漂流民たちのカルチャーショックが伝わったようである。

パネルの絵や色使いも話題に上ったが、漢字かな混じりの文章にも興味深く読んでいた。

二女高で作成した漂流民たちの略歴や、世界一周の行程を示した地図の展示は好評であった。



若宮丸漂流民の足跡
※地図は『世界一周した漂流民』より (1)
※説明文は二女高で調べて記入したもの

7 複製資料展と IS (インターナショナルスタディ)

宮城県第二女子高等学校は平成 22 (2010) 年 4 月、宮城県仙台^{にか}二華中学校・高等学校 (中高一貫教育校) としてスタートする。中高一貫教育校において実施する「課題解決型探求学習」の中に IS (インターナショナルスタディ) がある。世界の国々・地域について理解を深め、世界規模でおきている諸問題の情報を収集し、考えをまとめ、発信する学習である。

よく「世界の国々・地域に理解を深める」＝「外国の地理・歴史・伝統文化を学習すること」や「外国語の習得」と考えがちになる。しかし、外国人は自分の国を理解してくれることには親しみを持ってくれるが、実は目の前にいる「日

本人」のことが知りたいのである。実際に海外に行ったときに、日本人の生活習慣や、伝統文化を尋ねられ、答えに詰まる経験をした人は多いだろう。海外を旅すると、日本にいるときより、「日本」を意識する機会が多くなる。

今後は海外に出かける機会は今以上に多くなるだろう。国内にいても隣人や友人が外国人ということも多くなるだろう。当然、文化的摩擦が生じるだろうが、「なぜだろう？」と考え、違いを認め、「どうしたら一緒に生きられるのか？」と工夫することが求められるだろう。相手を知るためには自分を知らなければならない。

手作りの展示の完成度は、美術館や博物館の展示に遠く及ばない。しかし、準備過程や展示を見て、疑問に思ったことをすぐ調べられること、さまざまな教科の先生から説明が受けられることは、美術館や博物館ではできない経験である。歴史や伝統文化を知り、世界と日本の違いを考えるきっかけ作りには、複製資料展を実施することは有意義だと思う。

引用文献

- (1) 石巻若宮丸漂流民の会編 世界一周した漂流民 (ユーラシアブックレット 54) 東洋書店 2003 年

(たかはし・ひろみ)

宮城県図書館複製資料による「国宝源氏物語絵巻展示会」

美里町近代文学館 藤崎 浩司

2008年、この年は源氏物語が記録に現れてからちょうど一千年に当たります。紫式部による世界最古の長編小説を、メディアもこぞって騒ぎ始め、いたるところで様々なイベントが催されたようです。正直言って、ミレニアムなこの年に、この展示会を開催できたことはとても幸いなことではないでしょうか。兼ねてより、老若男女を問わず一般のご利用者の方々へ、もっと古典文学に親しむ機会をつくろうと強く思いながらも、なかなか実行に移せない日々が続いたのですが、今回、宮城県図書館の複製資料貸出事業を熟考し、「源氏物語絵巻の国宝級ともなれば普段目にすることがないのではないか。」と感じ、上司の許可を得、申し込みました。

宮城県図書館複製資料による

「国宝源氏物語絵巻展示会」

期 間	9月20日～10月5日
展示資料	国宝源氏物語絵巻（卷子本） 源氏物語絵巻（折本） 古今和歌集 枕草子 方丈記
展示場所	近代文学館（小牛田図書館）

以前、坤輿万国全図を借用した経緯があるの

で、手続きは滞りなくできました。当館で行う毎年恒例の「図書館まつり」に合わせて、展示期間は9月20日（日）から10月5日（日）までとし、ほかに古今和歌集、枕草子、方丈記と、日本古典文学を代表するすばらしい作品を一堂に展示することにしました。具体的にどのように展示するかは、直前まで悩み、職員同士で何度も相談しました。どうすればより多くの方に見ていただけるのか、他で展示会をしていたところに訪問して、参考にさせていただいたほどです。応対していただいた方、その節は本当にお世話になりました。結局、目に触れやすく、また、実際手にとって鑑賞しやすいところである1階玄関ホール付近に展示するのが望ましいということになりました。

さて、展示期間中ですが、町内外への広報活動を十分行ったので、（冒頭でも多少記述しましたが）千年紀を迎えた「源氏物語絵巻」を、立ち止まって見入る姿が平日でもよく目立ちました。展示資料に対して展示台のスペースがやや小さいようでしたが、それでもたくさんの方々が見に来られました。帰り際に「とてもいいね。」とお声を掛けていただいたこともあり、また、貴重なご意見も多々いただきました。なかでも文学を研究されているサークルの会員

の方や町内の高校生も来ていただいたことは、とてもうれしい限りでした。考えてみれば、学校の教科書に載っている文学作品が、いま複製として目の前にあり、手に触れることができるのですから、多少驚嘆するのではないのでしょうか。



思ったより利用者の反応はよく、展示会開催までの不安感が一気に飛んでしまった感じでした。

た。もちろん他館の貴重な資料であることに留意し、「お取り扱いの際は十分ご注意願います」と表記しまして、結果、ご鑑賞された皆様に丁寧に扱っていただき、無事終了することができました。ご協力本当にありがとうございました。

今回の事業を振り返ってみますと、「何人の方が来られたか」ではなく、「古典文学に触れるきっかけづくり」をすることが目的でありましたので、非常によい成果を得たと自負しています。一度だけでなく、今後も定期的に続けていこうと思っています。

(ふじさき・こうじ)

文化祭展示を通して得たもの

宮城県米山高等学校 学校司書 伊藤 由美

1 はじめに

高校の図書館に学校司書として勤務することになって5年目。「司書」としての役割を果たしているかという疑問ではあるが、しかし、私には「できることから始めよう！」というモットーがある。そして、毎年一つだけは新しいことにチャレンジしてみようと思うのである。

昨年、宮城県図書館館長伊達宗弘氏が、登米市内5校の高等学校に県図書館所蔵の複製資料を持参し、展示会開催のPRに訪れた。その時は正直初めてのことでイメージが湧かなかったが、今思えばあの訪問がなければ私の挑戦はなかったかと思う。きっかけは本当に些細な所から始まるのだと感じている。そして、宮城県図

書館が行なっている「22世紀を牽引する叡智の杜づくり」事業の一環として本校でも『禽譜』と『魚蟲譜』のレプリカを8月の緑風祭（文化祭）に併せて展示することになった。私自身初めての展示だったので、「より見やすく」「より分かりやすく」展示することに重点を置き、試行錯誤をしながらの展示だった。それゆえに、「ただ展示する」ということだけに終わったが、その時の私にはそれが精一杯のことであった。

そして、昨年の反省を踏まえて、今年はまた一つバージョンアップさせようと新たな試みを考えたのである。

2 本校図書館の現状

米山高校図書館は平成16年度読書活動優秀実践校として表彰されるなど「読書好き」な生徒を育むための環境作りや支援等を工夫してきた。その一つに「朝読書」への取り組みがある。全校一斉で取り組む朝の15分は静寂で精神的にも安定する時間である。生徒も勿論であるが先生方の取り組みも素晴らしく、生徒と一緒にその時間は読書に耽るのである。

しかし、最近では生徒の読書離れも後を絶たず、一日の平均読書時間は30分以内が一番多く、朝読書の時間が本校生徒の唯一の読書時間であると言っても過言ではない。図書館利用者が年々減少し、図書館から本を借りることなく卒業していく生徒も多い。図書館を利用するしないにかかわらず、全く読まない生徒に少しでも本に親しみ、読書の楽しみを知ってもらうことが本校の課題であると感じている。

3 図書委員会の現状

本校は園芸ビジネス科・普通科それぞれ1クラスずつ全校6クラスの小規模校である。よって図書委員も各クラス2名の12名である。「本が好き」といって図書委員になる生徒もいるが、そうではない生徒の方が多いのが現状だ。図書委員会の活動は生徒が思うより多く、大変だと感じる生徒も多い。自主性には欠けるが、その反面素直な生徒が多いので与えられた仕事は責任を持って行なうことができる。

4 文化祭への試み

(1) 図書委員と家庭看護・福祉選択者（園芸ビジネス科3年生4名）との共演

私は、図書委員として自覚を持ち、何かに取り組むことができる絶好の機会は「緑風祭」であると思った。そして今回の共演のきっかけを与えて下さったのは、司書研修会での登米高等学校司書 三浦てい子先生の実践発表であった。三浦先生のようにはできないが、「私にも何か授業の支援はできないだろうか」と考えた。そして、悩んだ末に思いついたのが「点字の絵本の作成」だった。3年生の園芸ビジネス科の家庭看護・福祉選択の授業に「視覚障害」について学ぶ時間がある。家庭科の非常勤講師である遠藤智子先生とのコラボなら心強いし、簡単な絵本を用いればそれほど難しくなく取り組み、図書委員も実際に点字を学び絵本を作ることで達成感を得ることが出来ると考え、実践した。

◎ 点字絵本作成の流れ

① 絵本選択

どんな絵本を「点字絵本」にするか迷った時、一昨年行われた司書研修会の講師である絵本作家とよたかずひさんを思い出した。その時の講演がとても印象に残っており、「この人ならきっと私の企画に賛成してくれる」と思った。そして、とよたさんの作品である絵本「ワニのバルボンさんシリーズ」なら内容も楽しく、点字として取り組む側にも読む側にもピッタリな絵本だと思った。

② 著作権問題

はじめは、絵本をカラーコピーして作ろうと考えていたので、必然的に著作権が発生する。まずは、絵本の出版社へ「点字絵本」作成について相談した。するとその出版社は「著者からは一任されており、そのようなことなら大いに結構。」と快く、そして手続きもなく承諾を得ることができた。「案ずるより産むが易し」とはこのことで、著作権について色々面倒くささらず、まずはアクションを起こしてみると意外にも簡単であるのだと知ることができた。

③ 点字絵本作成

まずは、点字に必要な道具を迫桜高校さんよりお借りした。絵本そのものに点字を加えても良かったが、それでは手作りの感じが薄いし、生徒が16名ほどだったので作業が進まないだろうと考え少々割高ではあるが、カラーコピーをして製本することに決めた。

次に点字を何に打つか？と悩んでいると遠藤

先生から「透明なクリアファイルはどうか」という話をいただいた。点字専用の絵本ではないので点字のためのスペースがあるわけではない。しかし、透明なクリアファイルであれば文字の上につけても文章や絵が隠れずに済むのである。

いよいよ実際に点字を打つ。何にでも決まりがあるように、点字にも約束事がある。点字は1マスに6つの点（3つの点が2列）があり、その点を規則（点字表）に従って打つのである。（例えば「あ」なら右上の点を1箇所打つ）そして、打った面を裏返しにして読むので、右から左へ打つのが決まりである。そのようなことをまず頭に入れてから基本的な練習を繰り返した。最初は理解するのに時間がかかったり、悪戦苦闘していた生徒たちであったが、次第に馴れて楽しくなり「もっと打ちたい」という声も出てくるほどであった。

打ち終わった点字を裏返しにして自分で確認（読んでみる）をしてから絵本に貼り付けた。最初は文句ばかり言っていた生徒たちだったが、徐々に真剣な表情になって一生懸命点字を打っている姿を見て、私の目標の半分以上は達成できたような気がして嬉しかった。そして、完成した絵本を見ていた生徒たちの表情からは充実感が感じられ、また嬉しくなった。



④ 緑風祭当日

家庭看護・福祉選択者が視覚障害について調べたことをまとめ、生徒力作の「点字絵本」そして県図書館から点字に関する本や本物の点字絵本などを借用し展示した。当日は、点字を知ってもらうために「点字体験コーナー」を設置し自由に触れていただいた。そして、図書委員が実際に「体験コーナー」に訪れた小学生に、点字の打ち方を教えてあげる等自分たちの学んだことを十分に生かすことができた実りある活動だったと感じた。

⑤ 「点字絵本」のその後

生徒たちが一生懸命作った「点字絵本」であることと、「目の不自由な子どもたちのために、また視覚障害の人が自分の子どもに読んであげられるために点字絵本を作成する」という当初の目的を踏まえて寄贈できればと考えている。今、その寄贈先を検討中である。



小学生に点字の打ち方を教える図書委員

⑥ まとめ

生徒たちの「手作り点字絵本」は、間違いがあったり、貼り付けた点字を何度も剥がした跡があったり決して綺麗なものとはいえない。しかし、生徒たちが一生懸命心を込めて作成した

絵本であり、お金では買えないたった一つの作品であると感じている。

最初は「完成できるか」という心配があったが、図書委員たちは早くから緑風祭のために取り組み、夕方遅くまで頑張った。また、家庭看護・福祉選択生徒の4名は、点字の他に視覚障害者について調べる等積極的に取り組んだ。この展示を通して、生徒達の普段見ることの出来ない新たな一面を発見することができただけでも「収穫あり」と感じている。最後に生徒たちそして、お忙しい中、私の企画を快く受けて協力していただいた遠藤智子先生に感謝したい。



(2) 「古典への誘い展」

～宮城県図書館複製資料の展示～

宮城県図書館が所蔵する貴重な資料を、より身近に、そして多くの方々に触れていただきたいと願い、今年も複製資料の展示を考えた。

今年は『東海道五十三次』と『写楽』（浮世絵聚花名品選）のレプリカを展示することに決めた。展示の仕方は昨年と同様にし、今年は絵に対しての説明を重視しようと考えた。

レプリカと一緒に説明文の冊子もついてくる

が、仮に「読んで下さい」と言って置いておいても読む人は少ないはずである。図書委員に1枚ずつ説明文を書いてもらおうと思ったが、点字と同時進行であったのでそこまで余裕がなかった。

そこで、多少面倒ではあるが、説明文を宿場町毎に拡大コピーをして、台紙に貼り付けることにした。本当は今と昔を写真等で比べたいと思っていたが・・・そこまでは手が回らなかった（私らしくて恥ずかしいが・・・）、結局、東海道五十三の宿場町が今現在何という地名になっているのか調べて、表記することにした。もちろんこの作業は、図書委員の生徒たちが行なった。

完成した展示室（本校1階物理室）は、準備が大変だっただけに圧巻であった。当日は、約70名（記帳していられない方もいるが）の方々に閲覧していただき、記念に図書委員が作ったしおりをプレゼントした。展示準備に快く協力していただいた本校技師のお二人にこの場を借りて感謝したい。

最後に、美術には全く縁のない私なので、本校美術の非常勤講師である石川美幸先生から、今回の展示に素晴らしい感想を寄せていただいたのでご紹介したい。

<感想>

今回の企画は、普段目にする事のない浮世絵版画に触れるとても良い機会でした。特に、初代広重の『東海道五十三次』はよく名前は耳にするのですが、全ての作品を一度に目にする

ことはあまりなく、じっくりと鑑賞することが出来て、とても良かったです。日本橋から京都へと、変化に富んだ構成で最後まで見飽きさせず、引っ張っていくのは大変なことです、それができた広重は改めてすごい人物だと感じました。特に好きな作品は「四日市」です。旅人が慌てて笠を追いかける様子や、前かがみになって進む動きと後ろにある柳の木の葉が大きく揺れる表現によって、とても強い風が吹いていると画面全体からよく伝わってくるからです。また、気になる作品として「島田」と「金谷」、この2枚の画面を上下に合わせてみると、まるで1枚の作品に見えることです。上空から見たように描かれていることが、他の作品とは少し違う印象を与えるのではないかと思います。今回の展示をじっくりと見ることによって、木版の刷りの素晴らしさや彫りの大変さを改めて知ることが出来ました。今後もこのような文化や歴史について、より身近に感じることが出来る企画を楽しみにしています。

（非常勤講師 石川美幸先生）

5 おわりに

石川先生の感想をいただき、展示の目的が少しでも達成できた気がしてとても嬉しかった。もちろん、一人ひとりの感じ方は違うかもしれないが、一人でも多くの人に「良かった」と言ってもらえることが、私にとっての喜びである。今回の展示も誰にでもできることの一つに過ぎないし、大した挑戦ではないかもしれないが、今回得た喜びを大切にチャレンジ精神を持って、

これからも生徒のため学校のため、そして、自分自身の勉強のために頑張っていきたいと思う。



(いとう・ゆみ)

子どもの本移動展示会活用報告

蔵王町立円田小学校 教諭 鈴木 やす子

1 はじめに

本校は、宮城県南西、蔵王連峰の東側に位置する蔵王町の北東部にある児童数 112 名の小学校である。

教育目標に「よく学び、心身ともに健やかで豊かな人間性を持つ児童を育成する」を掲げ、具体的な取り組みの一つとして読書活動の充実を図っている。10 分間の朝の活動の時間では、水・木曜日を朝の読書の時間に充てている。月・金曜日の朝の学級の時間にも読書を継続している学級も多い。

2 子どもの本移動展示会活用について

蔵王町には蔵王町ふるさと文化会館（ございんホール）というホール、公民館、図書館の複合施設がある。図書館はとても充実していて魅力的であるが、学区外にあるため気軽に日常的に利用できる児童は限られている。学校図書館

での新刊購入もそれほど多いわけではないので、県図書館のこの事業を活用し、本校児童の読書活動の幅を広げたいと考えた。

3 実施にあたって

展示にあたっては、図書委員会が中心となり本の展示、管理、児童への利用の呼びかけを行った。

本の展示では、図書室の机にコンテナごとに本を取り出して並べて、図書室内でいろいろな本を読めるようにした。また、利用できる時間や利用の仕方を話し合い、図書室に掲示しておいた。毎日、貸し出し当番の図書委員が利用状況を確認したり利用の仕方をチェックしたりという活動を行った。

4 利用の様子

利用時期に雨天が多かったこともあり、業間

や昼休みにはたくさんの児童が来室し、本に親しんでいた。

友達同士読みあう姿、本の内容について教えあう姿、上級生が下級生に読み聞かせる姿などが見られ、児童の温かな交流の場ともなっていた。



5 児童の声

利用のお世話をした図書委員からは、次のような声が聞かれた。

- ・いろいろな本があったので、楽しそうに読んでいた。
- ・友だち同士で一冊の本を楽しそうに仲よく読んでいた。
- ・本の内容を教え合って、お互いに勧め合っ

ていた。

- ・利用のきまりを守って読んでいた。

利用した児童からは、次のような感想が寄せられた。

- ・学校にない本がたくさんあってよかった。
- ・図書室にある物語の本をだいたい読み終わっていたので、県図書館の本を読むことができてよかった。
- ・図書室の本と同じシリーズのものがあったので、読むことができてよかった。
- ・低学年から高学年まで楽しめる本があってよかった。
- ・もっとユーモア小説のような内容の本があるとよかった。

6 終わりに

子どもの本移動展示会の活用は、児童の読書意欲を刺激することができたように思う。次年度も活用を考えている。

(すずき・やすこ)

平成 20 年度子どもの本移動展示会を開催して

栗原市若柳教育センター センター長補佐 佐々木 荘一

1 はじめに

栗原市若柳教育センター（若柳公民館）では「次代を担う子どもたちが思いやりのある

創造力豊かな子どもに育ててほしい。」との思いを込め、限られた予算の中で児童図書の実や図書ボランティアの育成を図りながら、

併せて学校の夏休み期間中に「子どもの本移動展示会」を20年以上にわたり開催してきました。

さて、子どもの本離れが憂慮されて久しいのですが、その原因のひとつにはテレビゲーム等のせいになっている保護者の怠慢(無関心)もあるのではないのでしょうか。

いわゆる本を読まない、読めない子どもは、決して本が嫌いなのではないと思います。

そのような子どもたちの目を本に向けさせるためには、自分だけで遊べるテレビゲーム等とは違い、保護者やまわりの大人が読んで、選んであげる必要があります。

とはいうものの、仕事等に追われがち多くの保護者にとって煩わしいことと感じられるかもしれません。

しかし、ご承知のとおり読書は子どもたちの健やかな成長に欠くことのできない大変重要なものです。

「子どもの本移動展示会」で、長いようで短い子育ての時期、親子でいろいろな「良書」に触れ読むことによって、本に親しむことの楽しさを実感していただけたらと願っております。

2 取組み等の概要

(1) 借用図書等

借用期間：自 平成20年7月23日

至 平成20年7月25日

借用点数：「あいちゃんのそら」

小林優華/作・絵

外299冊(Eセット)

(2) 入場者数

53名(受付簿記帳分)

(3) 広報等

①「若柳教育センターだより(6月号)」を栗原市若柳地区内4,368戸に配布

②若柳地区内の5小学校、4幼稚園には別途お知らせを配布

●参考

①若柳公民館図書室利用等状況

(H20.4.1～H20.9.30)

利用状況	貸出点数	3,124
	貸出人数	1,393
	予約	93
蔵書数	一般	13,222
	児童	4,338
	計	17,560

※蔵書数は図書のみ

②若柳図書ボランティア「ぽっかぽっか」の概要

*発 足：平成12年9月

*会 員 数：25名

*活動回数：155回/年

*活動内容：若柳公民館や学校、幼稚園等での子どもの本の読み聞かせ

(ささき・そういち)

川崎町公民館図書室事業報告

川崎町公民館 須賀 聖子

1 川崎町の紹介

川崎町は宮城県の南西部に位置し、人口は1万400人ほどの町です。歴史は古く、宮城・山形をつなぐ笹谷街道の要所として栄え、伊達藩の御殿湯として480年の歴史ある青根温泉があり、また、「慶長遣欧使節」で知られる支倉常長の一族のふるさとであるといわれています。町の東部には周辺の桜が春を雄大に彩る釜房湖や東北で唯一の国営公園であるみちのく湖畔公園があり、自然豊かな町並みは四季折々にすばらしい景観と豊かな農作物を生み出しています。

2 図書室の紹介

川崎町には「図書館」はなく公民館内に「図書室」として設置されています。平成18年度の耐震補強工事に伴い、図書室を改修し蔵書の大規模な見直しを行いました。平成20年8月現在の蔵書数は、6,927冊、登録者数は211名。平成19年度延べ利用者数は380人です。

3 施設紹介

川崎町公民館は、図書室はもちろん、他に談話室、講座室、調理室、ホールを備え、公民館長兼生涯学習課長1名、生涯学習課3名、公民館職員1名、社会教育指導員2名で構成されて

います。公民館内にある図書室のため、高齢者の方の囲碁クラブの合間に読書、学校帰りに図書室で待ち合わせて読書など、幅広い年齢層の方々から利用されています。

4 事業報告

◆子どもの本展示会

◎子どもと本との出会いの場

平成20年7月12日、13日の2日間、公民館の3階ホールを会場に、「子どもの本展示会」を開催いたしました。子どもと本の出会いの場にしようと毎年行われている事業です。

子ども達の読書活動は、成人のそれとは大きく異なる点があります。子どもにとっての読書には顧客の二重性という特徴があります。大人であれば、自分のお金で好きな場所から好みの本を購入ないし、借りることが出来ます。しかし、児童の読書活動はそうではありません。本を購入する(お金を支払う)のは、大人であり、当然子ども達は「大人が選んだ本」の中から最終的に本を手にしざるを得ないのです。今回900冊という大規模な本の展示会を通して、より自由に多くの本と出会う機会となり、子ども達の読書活動への興味、関心を伸ばすことへとつながりました。



展示会に訪れた子ども達の様子

◎すぐれた絵本との出会いを

子どもは絵本を読んでもらいながら、いっしょに絵を見ている。子どもにとって絵本は優れた美術であると共に洗練された美しい日本語によって綴られています。子どもは、未知の美しい日本語を読んでもらうことによって、絵本の物語の楽しさと共に国語力を身につけていきます。絵本を読んでもらっている子どもの言葉の発達が早く、表現力も豊かになることでしょう。子どもの本展示会は年一回の単発的は事業ですが、絵本との出会いを通して、子ども達の国語力、表現力を伸ばすきっかけとなればよいと感じております。

◎「子どもの本展示会」の奥深さ

展示会では多くの絵本を楽しむことができます。この楽しみは、実は子ども達の国語力とも密接に関わっています。

①言葉の力 ②お話しを集中して聞く力 ③抽象的な思考 ④活字や本への親近感

など未就学児はもちろん小学生、中学生に至るまでこの四つの力は今後の国語力に大きな影響を与えます。それには、ただ本を並べておけば良いというのではなく、来場者への読み聞かせや会場内の読書スペースの活用、好奇心を誘

うポスターなど細部にわたる工夫が必要です。主催側の創意工夫次第でより良い展示会が出来ると思いますので、担当者のみならず多方面からのアイデアを持ち寄り、画期的な展示会の開催が可能となります。

もちろん各市町村によって人員、予算、日程等事情は様々でしょうが、お互いに各図書館や公民館で情報提供しあいながら、より良い展示会を目指したいものです。

◆「読み聞かせ」の時間

2日間の本の展示会の中で、今回より読み聞かせの時間を導入しました。これは、宮城県図書館での研修をヒントに組入れたメニューです。

子どもの本展示会は、ともすれば、ただ絵本が並んでいるだけの会場になりかねません。

子どもと本をつなぐ架け橋の一つとして読み聞かせの時間を導入してみました。

元気な子ども達が集まった会場で、初めはちゃんと話を聞いてくれるか不安でしたが、本を読み始めると、意外と早く静かになり子ども達は、お話の世界に夢中になりました。

特に、表紙を見て面白そうと感じても字が読めないような幼い来場者は、「ねえ、次はこれを読んで！」と次々とリクエストがかけられ、計21冊の本の読み聞かせとなりました。

図書室のイベントとして、今後とも更なるアイデアを出し合いながら事業を続けていければよいと考えています。

(すが・せいこ)

企画展「はっぴい さんぼう—和算の世界へようこそ！—」を終えて

東北大学附属図書館 情報サービス課閲覧第二係長 沼田 幸子

今年度の東北大学附属図書館企画展は、宮城県図書館と共催で2008年10月25日(土)から11月24日(月)までの約1ヶ月間、「和算」をテーマに宮城県図書館で開催しました。当館の展示ワーキンググループメンバー12名と宮城県図書館のワーキングメンバーとの合同打合せを数回もち、展示企画から実際の展示、講演会の詳細などを、約5ヶ月にわたって準備しました。

いささか奇抜な印象を与えるこのタイトルは、算聖(数学の聖人)とも称される関孝和の主著『^{はっぴいさんぼう}発微算法』(1674年刊)と、「ハッピー」な数学、すなわち楽しく親しみやすい数学の意とを掛け合わせたものです。

関孝和の没後300年を記念し、関孝和ゆかりの資料を所蔵している宮城県図書館と、全国和算資料の3分の2を占めるといわれている東北大学附属図書館から、新収の平山文庫を含め精選した資料をもとに、和算に親しめる展示会を開催しました。

展示会は、一般市民の方にも親しめる展示としましたが、特に和算に興味を持たれている方々からは好評を得ることが出来ました。小さい子どもさんを連れのお父さんお母さんが、「問題を解いてみよう！」の体験コーナーで、一緒にパズルに取り組んでいる姿も見受けられ、

2,566名の来場者がありました。



体験コーナー



開会式

展示会の構成は、第1部「といてみよう！和算の問題」として、いろいろな和算書の中から、「鶴亀算」や「ままこだて」の資料を展示。



第1部展示

第2部「のぞいてみよう！塵劫記の世界」では、和算流行のきっかけでもあり江戸期を通し

て庶民に親しまれた『塵劫記』をはじめ、江戸の数学と庶民を取り巻く和算の世界を紹介しました。



第2部展示

第3部「ふれてみよう！和算家の人生」では、関孝和など、和算のはじまりから様々な流派を生んだ和算の展開について、人物とその業績を中心に紹介しました。また、戸板保佑など仙台・東北地方に関連する和算家についても取り上げて展示しました。



第3部展示

【記念講演会】

第1回 10月25日（土）13:30～15:30

講師：遠藤寛子氏（小説『算法少女』著者）

演題：「算法少女のなぞ」

小説が生み出されるまでを、和算書『算法少女』との関係やご自分の体験を通して楽しく講

演されました。一般市民や中学校・高校の先生など86名が熱心に聞き入っていました。



平成20年10月25日の講演会

第2回 11月8日（土）13:30～16:15

講師：土倉保氏（東北大学名誉教授）

演題：「和算を楽しんだ江戸時代の人々」

講師：萬伸介氏（宮城教育大学教授）

演題：「いろいろな見方で楽しもう！和算の問題」

土倉先生の講演では、江戸文化の中心的な意向である「美の模索とそれを作り上げていく楽しさ」、和算で扱う美しい図形、正確な計算、その表現との関係について話されました。魔方陣の解き方の法則を見つけようと必死に取り組んでいる人もありました。

萬先生の講演では、和算を題材にして、「数学」のいろいろな見方、考え方などを紹介されました。一緒に図形の形を変え、図形に色を塗るなど、作業をとおして図形を考えていく楽しさを話されました。

100名以上の、和算を勉強している方や一般市民、学生などがメモを取りながら熱心に聴いていました。



平成20年11月8日の講演会

今回の展示会にあたり、ご協力いただいた各機関、ご指導いただきました諸先生方に、この場をかりて御礼申し上げます。

(ぬまた・ゆきこ)

「絵本のお医者さん」開業記

岩沼市図書館 司書 佐藤 あづみ

岩沼市図書館毎年恒例のイベント「みんなのとしょかん」で、今回新しく取り組んだ「絵本のお医者さん」について報告します。

1 企画の概要

日 時：平成20年5月（全8回）
毎週木曜日 10時～17時
毎週土曜日 13時～15時

会 場：岩沼市図書館

申 込：不要

参加費：無料

内 容：参加者持参の壊れた絵本を、職員が修理する

2 企画の背景

形あるもの、いつかは壊れる——図書館の本とて例外ではありません。図書館のカウンターの中では、毎日次々と修理に取り組んでいます。

特に子ども向けの本は、修理が多くあります。子どもが破いてしまった絵本を、セロハンテープで修理して持参する利用者も少なくありません。セロハンテープを使用しないよう呼びかける掲示等も試みましたが、あまり効果を感じられませんでした。「直そう」「破片をなくすまい」という好意から始まった行為が、かえって資料を傷めてしまう状況に心を痛めていました。

明るく、楽しく、気持ちよく、図書館の取り組みを知っていただく方法はないものだろうかと考えていました。

3 企画の目的

今回の企画は、図書館で行なわれている修理の取り組みをもっと知ってもらうことで、破損時の対応や利用マナーの啓発につなげたいという意図で始まりました。

取り組みを知ってもらうには、実際に見てい

ただくこと、体験していただくことが一番です。各地で行なわれている「おもちゃのお医者さん」の図書館版として、「本のお医者さん」を考えました。しかし、本では修理内容があまりに多岐に渡り、実現可能性が危ぶまれます。そこで絵本に限定しました。結果的に、子どもの頃からの利用マナー啓発につながり、親子で絵本に親しむ機会も増やせるのではないかと考えました。

4 工夫した点

(1) 白衣

図書館で何か変わった面白そうなことをやっている——あらかじめ絵本を持ってきた参加者のみではなく、一般の図書館利用者にもアピールできることが、イベントとして必要だと考えました。そこで、お医者さんらしく白衣姿で対応することにしました。これは実際、周囲の目をとても引き付けました。白衣姿はこわいと泣き出してしまったお子さんもいましたが、おおむね面白がってもらえました。

(2) 貼り薬

持参した本がただ直ったのみでは、企画の意図が十分に活かされないと考えました。自宅での修理に役立ててもらおうと、「貼り薬」として、ページ破れ修理専用の補修テープとカバー補強用のブックコートフィルムを手渡しました。

(3) 入院制度

その場で修理が可能な絵本ばかりではないだろうと、入院制度を設けました。診察券とカルテが一緒になった用紙を、預かり証代わりに用意しました。

5 症例紹介

【症例1】背表紙がはずれた厚紙絵本

『はらぺこあおむし』の厚紙絵本は、背表紙がはずれて、ページにも破れが見られました。当館の資料であれば、貸出回数や価格、今後の利用見込みや修理の手間を考えて、買い替えの判断を行なうであろう状態です。しかし今回は、利用者にとって他に替え難い資料であろうと、クーター¹⁾を作って修理しました。

【症例2】ボロボロのウォーリー

『ウォーリーをさがせ!』は、子どもたちにとっても人気のある本です。持ち込まれた本はもうボロボロで、何時間もかかっていたの修理となりました。修理のみではなく、予防や買い替えにも取り組んでいく必要があることを改めて考えさせられました。

【症例3】バラバラになったしかけ絵本

今回最も手がかかりました。リボンを円形のしかけに沿ってまわすと絵が変わるタイプの絵本です²⁾。ページやしかけの破れが多く、しかけの1つはバラバラの破片状態で一部が無くなっていました。他のページのしかけを参考に、似た紙を用意して作成しました。

6 開催結果

8回(その他視察のために1回)の開催に、41人が参加し、26冊を修理しました³⁾。目の前で大好きな絵本が直ったことにまさに目を輝かせて喜ぶ子どもたち、その絵本への思い入れを熱

く語る大人たちの姿に、こちらも感じ学ぶことが多くありました。

開催後は、破れてしまった部分をそのまま申し出てくださる方も増え、修理への取り組みを少しは利用者の皆様に知っていただけたと感じています。

なお今回の取り組みは、新聞やテレビに取り上げられました⁴⁾⁵⁾⁶⁾。また、お問い合わせをいただき、視察を受け入れました⁷⁾。

7 今後の課題

相手にとってかけがえのない1冊に、果たしてこれが最良の修理方法なのだろうか、内心迷うこともありました。より適切・高度な修理技術を習得できるよう、国立国会図書館や日本図書館協会等が行なっている、実習を伴う資料保存の研修に参加していきたいと考えます。

また同様の企画を行なう機会があれば、診断書の作成・配付や、開催時間以外でも修理への取り組みが分かる展示等、より効果的なものになるよう改善していきたいです。

最後になりましたが、一緒に取り組んでくださった通筋芳恵主幹と、応援してくださった図書館職員の皆様に、改めて感謝の意を表します。どうもありがとうございました。

1) 本の背の部分に貼る、本の開きをよくするためのクラフト紙の筒。

2) 正確な書名を控え損ない、破損状況の記録写真は誤って消去してしまいました。『だれでしょうか？ピーターラビット「ピーターラビットのおはなし」より』(大日本絵画、2006)と思われます。

3) 26冊の修理内容は、補修テープ12冊、ボンド9冊、ブッカー補強3冊、クーター1冊、入院4冊(ここまで延冊数)、その他不明4冊でした。

4) 『河北新報』2008年5月5日「傷んだ絵本治療任せて職員『お医者さん』に大切にす気持ち養う岩沼市図書館」

5) 『リアルタイム』(ミヤギテレビ)2008年5月14日放送「岩沼市図書館『絵本のお医者さん』」

6) 『朝日新聞』2008年5月14日(宮城面)「傷んだ絵本修理します 岩沼市図書館に『絵本のお医者さん』」

7) 仙台市の児童センター、丸森町の学校図書館ボランティア団体、市外の中学校図書室担当教諭と、公共図書館以外の方々が関心を寄せてくださったことがとても印象的でした。

(さとう・あづみ)

目で見るみやぎ ～県政ニュースを振り返る～

宮城県図書館利用サービス班 只野 義広

1 はじめに

平成20年度に本館が開催いたしました「みやぎ県民大学開放講座」は、平成20年11月1日

(土)から11月29日(土)までの期間の毎週土曜日、全5回(第1回:11月1日、第2回:11月8日、第3回:11月15日、第4回:11月

22日、第5回：11月29日）が実施されました。

「みやぎ県民大学開放講座」については、本館職員が講師となり本館が所蔵する資料を基に知り得た情報等を分かりやすく説明するものですが、本年度は、全5回の開催とし、そのうち第1回、第3回、第5回をそれぞれのグループが、第2回、第4回を各1名の職員が企画立案することとなりました。

グループの編成については、通常業務の担当部署を越え様々な職員で構成され、私たちのグループは、総勢9名で、11月1日の第1回目の講座を担当することとなりました。

その後、図書館が所蔵する資料のうち何れの資料を取り上げるべきか幾度と議論をし、過去の県民生活等が伺い知れる貴重な映像資料の「県政ニュース」があることから、その資料を取り上げることとしました。内容構成については、「県政ニュース」とは、どのような資料であるかを説明し理解していただき、また、「県政ニュース」の中から2つの映像をご覧いただき、その当時を理解し、それに関連する事柄を説明することとしました。開催した講座の概要は、次項のとおり。



2 講座の概要

(1) 講座名

平成20年度みやぎ県民大学開放講座

目で見るみやぎ ～県政ニュースを振り返る～

(2) 日時

平成20年11月1日（土）13：30～15：00

(3) 場所 本館 2階 ホール養賢堂

(4) 講座内容

①「県政ニュース」とは

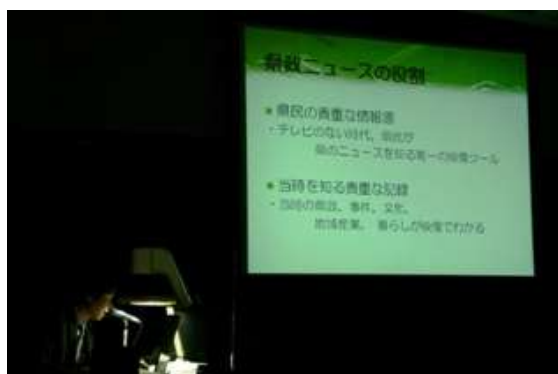
昭和29年から昭和63年までの当時の県政、事件、文化、地域産業、暮らしなどを記録した16mmフィルム（映像）であり、当時を知る貴重な記録です。当時、一般家庭でのテレビ普及率が低く、みやぎに関する事柄を広く県民に広報するため、宮城県（文書広報課）が制作したものです。

「県政ニュース」の上映は、映画館でのニュース映画としての上映や市町村・学校・自然の家・青年団・町内会等へ貸出しされ、それぞれ場で上映されました。

しかし、その後の様々なメディア媒体の普及により16mmフィルムの利用が激減し制作が中止となりました。

16mmフィルムとしての「県政ニュース」は貴重であるものの、16mmフィルム媒体は、利用するほどに劣化すること及び16mm映写機の確保・保守が困難なため、当館が所蔵する「県政ニュース」の16mmフィルムをデジタルアーカイブ化（DVD・ビデオテープ化）し、現在、利用者が「県政ニュース」映像を気軽に利用出

来るようになっていきます。



② 資料上映及び解説等

《上映資料 国民温泉となる鳴子温泉郷 樹氷への招待 製作年：1959（昭和34年）》

鳴子温泉郷は、平安の時代から開湯千年という、非常に歴史ある温泉郷となっております。

また、温泉の効能や泉質の良さにも定評があることや国内にある泉質の総数11種類のうち8種類もの泉質が集まっており、源泉数においては、400本以上に及んでおります。

温泉利用の効果が充分期待され、かつ健全な温泉地としての条件を備えている地域として環境省が指定する「国民保養温泉地」に昭和35年10月1日「奥鳴子・川渡温泉郷」として指定されました。「国民保養温泉地」の指定は昭和29年に始まり、現在まで、全国で91の地域が指定されていますが、県内で指定を受けているのは、「奥鳴子・川渡温泉郷」のみとなっております。

《上映資料 牡鹿コバルトライン 製作年：1970（昭和45年）》

牡鹿コバルトラインは、牡鹿郡女川町と旧牡鹿町鮎川（現在の石巻市）を結ぶ有料道路とし

て、昭和46年4月1日に開通しました。「牡鹿コバルトライン」の名称は、公募で決まった通称で、正式名称は「宮城県営牡鹿有料道路」という名称でした。総延長29.4Km、総工費29億5千万円をかけ作られた道路で、平成8年4月1日に無料化され、「県道220号牡鹿半島公園線」となりました。

《上映資料 特報 津波宮城県を襲う 製作年：1960（昭和35年）》

この資料は、昭和35年5月24日にチリ地震津波が宮城県を襲った際の被災状況を記録した映像で、県の被害状況は、死者41名、行方不明12名、負傷者625名、家屋全壊1、206戸、家屋半壊899戸、家屋の浸水や堤防決壊など多数の被害があり、被害総額116億円以上（被害状況：宮城県災害年表より）に上った甚大な災害でした。

明治以降のみやぎの主な地震等を調べると明治29年の明治三陸地震津波をはじめ幾つもの地震が発生しております。特に多数の死者・行方不明者となった地震は、明治三陸地震津波（死者・行方不明者：2万人以上）、昭和三陸地震津波（3千人以上）の宮城県沖を震源とする地震であります。

宮城県沖を震源とする地震は、過去にも定期的に発生しており、近い将来に高い確率で発生すると考えられております。調査報告等によりますと今後、宮城で発生が見込まれる地震としては、宮城県沖を震源とする地震と長町ー利府線断層帯を震源とする地震が想定されており、

今後の地震発生確率は、宮城県沖を震源とする地震が10年以内で60%、30年以内で99%と相当高い確率での発生が予測され、日頃の地震に対する備えが必要と思われます。

3 グループ（9名）

企画管理部 総務班 高橋 深雪
〃 〃 佐々木 剛
〃 企画協力班 高橋 智恵

資料奉仕部 調査班 田中 則行
〃 〃 佐々木 英樹
〃 〃 柴田 香織
〃 利用サービス班 村田 隆子
〃 〃 鈴鴨 秀一
〃 〃 只野 義広

(ただの・よしひろ)

江戸城内の将軍家図書館—^{もみじやまぶんこ}紅葉山文庫^{しよもつぶぎょう}と書物奉行

宮城県図書館企画協力班 大和田 順子

1 はじめに

私が^{でくねたつろう}出久根達郎著の時代小説『^{おしよもつどうしん}御書物同心日記』(講談社 1999)に出会ったのは全くの偶然からであった。この小説は続編として『続・御書物同心日記』、『御書物同心日記・虫姫』という2冊が出されていて、3冊とも数編の短編から成っている。

この小説の主人公は江戸城内の「紅葉山文庫」に出仕し、「本」に対する興味・関心が旺盛で、加えてその修理が得意な^{しのめじょうたろう}東雲丈太郎という「^{しよもつどうしん}書物同心」である。「紅葉山文庫」、「書物同心」という語はどちらも私にとって初めて見るものであった。時代小説は数多くあるが、その中にこの語が登場するものがどのくらいあるだろうか。多分それほど例はないと思う。

この短編集は、紅葉山文庫、書物、古本屋はもとより江戸時代の風物についての蘊蓄がほどよく語られ、同時に宮仕えの役人や町人の暮らしも生き生きと描かれている。読んでいるうちに江戸情緒に浸っているような気持ちになり、興味も喚起された。

例えば、将軍から入用の下命のあった書物が文庫の中のどこにも見当たらず、係の役人達が江戸市中の古本屋という古本屋を必死に同じものを探し求める話や火気厳禁の文庫の蔵の中で執務が相当につらい冬季に、唐辛子を衣服の中に縫いこんで出仕する話などが描かれている。

そのうちに実態はどうであったのかを自分なりに確かめてみたいと思うようになり、紅葉山文庫、江戸城に関する資料にあたり、それをま

とめたものを平成 20 年 11 月 8 日に「平成 20 年度みやぎ県民大学開放講座」の中で発表した。その時の内容を中心に再構成したものが本稿である。

2 紅葉山文庫

江戸時代の各地の有力大名は自ら所有する書物を収納するための「文庫」を設置していた。「文庫」とは文字通り「ふみくら」とも呼ぶことができる。また、利用者が極めて限られることを除けば、機能としては現在の図書館に近いものといえるかもしれない。その中で最大の規模であったのが徳川宗家の紅葉山文庫である。

かつての江戸城西の丸と吹上地区^{ふきあげ}の中間、現在の宮内庁に隣接して「紅葉山」と呼ばれる樹木の生い茂った地区がある。江戸時代にはそこに歴代将軍の霊廟や武具等を収納する倉庫が設置され、その一群の中に書物を収納していた書庫も含まれていた。それがここでいう「紅葉山文庫」である。もっともこの名称は明治時代以降のものであり、江戸時代には単に「御文庫」あるいは「楓山文庫」と呼ばれていた。江戸城の度々の火災にも罹災することなく、幕末期には 11 万冊に上る蔵書があったといわれる。

この文庫の基礎となったのは徳川家康の蔵書であった。多くの書物とともに駿府から江戸城に入った家康は江戸入城当初、本丸の一角にその書物を収蔵する文庫を設置した。その後 3 代将軍家光が 1639 年（寛永 16）に新たに 1 棟の文庫を新築して、その資料を収納した。こうして幕末まで紅葉山文庫は「徳川将軍家の図書館」としてその歴史を刻むことになるのである。

ここに所蔵されていた書物の 8 割以上は中国書いわゆる漢籍を中心とした各領域の専門書であった。特に医学、中国の地誌類はその数が多かったようである。逆に娯楽用の書物は収集の対象とはされていなかった。つまり、江戸時代の庶民が楽しんでいたであろう絵草紙類、世話物や人情物の娯楽小説の類は文庫の蔵書にはされなかった。たとえば、文学関係ではこの当時すでに古典となっていた『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』『枕草子』『徒然草』など私たちが古典の教科書でおなじみのものが主として収集されていた。また、戯曲や類書が多く存在する注釈書についても収集対象とはされなかったようである。

このように収集対象を極力限定することで幕府は文庫の水準の維持を図ったものと考えられる。同様に重複本についても細かく収集基準を設けることで、限りある文庫のスペースの確保に努めていた。ここで発生した不要本は入札で払い下げられ、その代金で書物の補修等が行われた。興味深いのは将軍の手沢本^{しゅたくぼん}、いわゆる愛読書（この中には将軍自らが書き込みを入れているものもある。）は殊に貴重書として大事に扱われた。

また、文庫には書物のみならず幕府が作成した様々な公文書・絵図・郷帳^{ごうちょう}（村単位の石高の統計書）等がその中に含まれていた。いわば当時の公文書館ともいえる性格も兼ねていたのである。こうした資料はその多くが国立公文書館等に引き継がれ現在に至っている。

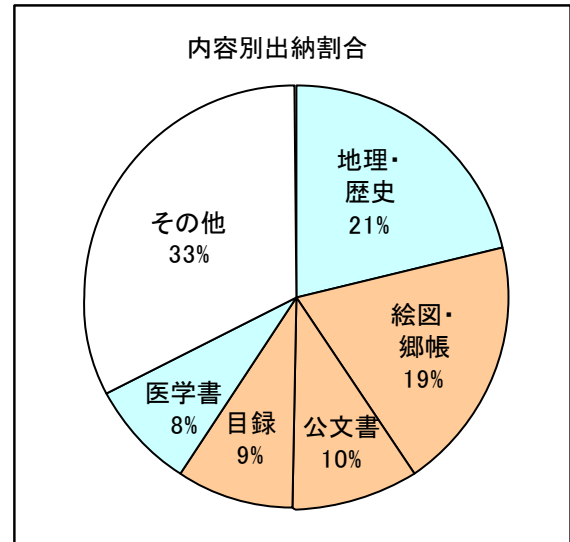
3 『幕府書物方日記』

この文庫は書物奉行という役人が、資料の収集、整理、保管、提供といった現在の図書館司書と変わらない業務を行っていた。冒頭に述べた「書物同心」の上司にあたる役職である。国立公文書館には1706年(宝永3)から1857年(安政4)にかけての書物奉行の「業務日誌」約150年分が残されている。これは現在でもマイクロフィルムでの閲覧が可能である。そのうち1706年(宝永3)～1745年(延享2)の分については『幕府書物方日記』(全18巻)(以後『日記』と略す)のタイトルで東京大学史料編纂所によって『大日本近世史料』という江戸時代の原典を集めたシリーズのうちの学芸資料として出版されている。

『日記』には日々の業務内容、その日に出納されて将軍あるいは幕府の役人等が利用したであろう書物について詳細に記録されている。さらに、天候、洪水や地震といった自然災害、江戸城内外の様々なできごと、将軍及びその家族に至るまでの事柄が時としてかなり細かく記載されている。例えば、1727年(享保12)将軍吉宗が「吹出物」を患ったために出御がかなわなかったという記事もある。

この『日記』に収録されている期間は8代将軍徳川吉宗(1684～1751)の将軍在位期間(1716～1745)のすべてを含むために、吉宗の文庫の利用状況の推測が可能であるともいえる。第5代紀州藩主の徳川吉宗が江戸幕府の8代将軍として江戸城に入ったのは、1716年(享保元)のことである。以後嫡子家重に家督を譲る1745年

(延享2)までの30年の間には、いわゆる「享保の改革」を行い、徳川幕府の中興の祖とされ、同時に書物にも造詣が深く、将軍在位中にこの文庫の目録の改訂を3回も命じている。



『日記』の各巻末には出納された資料名が記載されているが、それらを集計すると約30年間の将軍在位期間中に出納された資料は延17,000点(1年平均566点)にも及んでいる。これらのすべてを吉宗が手にしたわけではないにしても、直接読んだものも相当数含まれていたはずである。このうち約2割は日本や中国の歴史、地理関係の書物であり、これと同じ割合で各藩の領国絵図や村単位の石高を記した郷帳が頻りに利用されている。また、公文書、文庫の目録、医学書等がそれぞれ各1割程度を占めている。文学に関しては『平家物語』『宇治拾遺物語』『太閤記』等を含め和歌、漢詩等の利用はそれほど多くはなかったようである。(グラフ参照)

4 書物奉行

書物奉行は3代将軍家光の時代1633年(寛永10)に設置され若年寄の支配下にあった。定員は4名、配下に同心(初期は4人、その後21人に増員された。冒頭の出久根氏の小説の主人公もこの同心である。)及び蒔絵師、塗師等の技術職がついていた。江戸時代を通じて90名が書物奉行の職に従事し、その俸禄は平均で約200俵、7人扶持であったとされる。著名な書物奉行の例としては「甘蔗先生」の別名のある青木昆陽(1698-1769)、探検家でもあり、文庫に含まれている貴重書の管理方法を定め、目録の整備を行った近藤重蔵(1771-1829)、天文学者でもあり、シーボルト事件に連座して捕われの身となった高橋景保(1785-1829)等の名をあげることができる。

書物奉行は紅葉山の詰所で文庫の資料の収集、分類、目録の作成、将軍や幕府の役人から要求された資料の出納及び資料の管理等を毎日の業務としていた。目録作成にあたっては、書名とその形態のみが記載され、江戸時代には「紅葉山文庫」を示す蔵書印の押印はされなかった。また、記載された目録の内容を写し取ることや外部に漏らすことは固く禁じられていた。

『日記』から将軍吉宗の文庫資料の出納依頼はかなり頻繁であったことが読み取れる。文字通り時間、冊数には無頓着といえるほど次々に注文を出している。時には様々な質問も担当者に投げかけることもあった。一例として、中国人の画家の名前等について、砂糖の製法について等が具体的に記されている。

「紅葉山文庫」には様々な種類の幕府の公文

書もその中に含まれていた。大名家からの書付等については偽書である可能性の高いものは目録からはずし、場合によっては処分するようということ吉宗が自ら命じていることから吉宗自身が文庫の内容についてはかなり熟知し、興味・関心を持っていたことがうかがえる。

こうした業務にあたっては幕府の御用学者たちの助言もあったとはいえ、書物奉行自身も様々な学問に通じ、相応の知識が要求されたことであろう。彼らが資料そのものの研究・検証にも関わることも稀ではなかったようある。言い換えれば当時の学問研究の発展にも寄与したともいえるであろう。

「紅葉山文庫」において毎年夏季に約3ヶ月にわたって必ず行われたのが「御風干」という蔵書すべての虫干し作業であった。これは木箱、長持に防虫剤とともに入っている書物をすべて外に持ち出し1点1点外気にあてるという作業である。同時に資料の状態、所蔵の有無も確認された。この作業は将軍の蔵書に直に触れるわけであるから、担当者にとっては相当の緊張感、気苦労があったことが想像できる。

出久根氏の小説にも「御風干」を舞台とした様々な「小事件」が取り上げられている。例えば、さる大名家の姫君が婚礼の際に持ち込んだ「巻物」がなぜか文庫に所蔵されていた。この中身を絶対に見ることなく、風に当てるようにと上役に命じられた主人公がそのとおりに作業していた。ところが突然どこからか忍び込んだ猫が「巻物」の紐に飛びかかり、紐が解けて内容が...といった珍事も描かれている。

5 まとめ

「紅葉山文庫」は現在の公共図書館のように不特定の利用者にサービスを提供するものではなかった。しかし、現在の図書館司書にあたる書物奉行という役人が業務に関与することで多くの貴重な資料が後世に受け継がれていくことが可能になったのである。入手した書物(資料)の内容の確認と受入の可否についての判断、目録の作成、資料の保管・管理、必要時の出納、将軍を初めとする資料に関する質問に対する回答など実際にこうした業務に携わってみるとわかることであるが、ある程度の知識はそこそこに必要であると思う。

図書館は「人」が手をかけることによって、つまり「保護・育成」することによって成長していくものといっても過言ではないであろう。インドの図書館学者ランガナタン (Shiyali Ramamrita Ranganathan 1892~1972) の図書館学5原則のひとつである「成長する有機体」という表現がそれである。一切何の手も加えずに分野はいうに及ばずシリーズ、全集も順不同に雑然と並んでいる本の中から目的とする1冊を探し出すことがどれほど大変な作業か想像してみるとわかると思う。

規模の大小や利用者の如何にかかわらず図書館のこうした業務に携わる「人」の存在の重

要性を「紅葉山文庫」のありようは物語っているようにも思う。それは、今も昔もどのような図書館においても変わらないことである。

参考文献

- ① 東京大学史料編纂所 『幕府書物方日記』1~18 (大日本近世史料) 東京大学出版会 1964~1988
- ② 森潤三郎 『紅葉山文庫と書物奉行』 臨川書店 1978
- ③ 福井保 『紅葉山文庫 ; 江戸幕府の参考図書館』(東京郷学文庫) 郷学社 1980
- ④ 国立公文書館 『内閣文庫百年史』 国立公文書館 1985
- ⑤ 出久根 達郎 『御書物同心日記』 講談社 1999 (講談社文庫 2002)
- ⑥ 出久根 達郎 『御書物同心日記 ; 続』 講談社文庫 2004
- ⑦ 出久根 達郎 『御書物同心日記 虫姫』 講談社 2002 (講談社文庫 2005)
- ⑧ 松本幸一 「御書物奉行」(前編・後編) 『図書館雑誌』 2003. 3~2003. 4
- ⑨ 竹内誠 『徳川幕府事典』 東京堂出版 2003
- ⑩ 中野三敏 『江戸の出版』 ペリかん社 2005
- ⑪ 山本博文 『江戸時代年表』 小学館 2007
- ⑫ 平井聖、鈴木悦子 『図説江戸城 ; その歴史としくみ』 (歴史群像シリーズ) 学習研究社 2008



平成 20 年 11 月 8 日の講座

(おおわだ・じゅんこ)

県民大学「折本について」報告

宮城県図書館企画協力班 曾根 晃

1 折本とは

「本」には大きく分けて、日本に古くからある和装本と、明治時代になって日本に入ってきた洋装本とがあります。折本は和装本の一様で、^{かんすほん}卷子本、いわゆる卷物の用紙を卷かずに一定の幅で折りたたんだ本です。普通、前（表）と後（裏）とに、紙または板で表紙をつけます。読経に使^{きょうかん}う経卷などでお馴染み（図1）です。

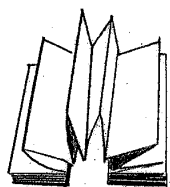


図1 折本

2 プロジェクトチームの立ち上げ

今年度のみやぎ県民大学開放講座は全5回構成でした。講座のうち第1回、第3回、第5回はそれぞれ職員のプロジェクトチームでの講座です。私たちのチーム8名はその第3回目を担当することになりました。

プロジェクトチームの立ち上げは6月、みやぎ県民大学開放講座の受講生募集開始は9月と決まっていたので、第3回講座のテーマの設定と運営略案は遅くとも8月までに決めておく必要があります。私たちの担当する第3回目はちょうど真ん中、折り返し地点です。図書館で実施するみやぎ県民大学開放講座は、貴重資

料であったり、映像資料であったりとテーマはそれぞれですが、資料の「内容」についての話が多くなる傾向がありますので、私たちの講座では

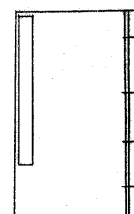
- ① 資料の「内容」ではなく「形態」に着目し参加の皆様に興味を持っていただく
- ② 座学ではなく実際に体験していただく
- ③ 気楽に楽しく参加していただく
- ④ 作成したものが記念になる
- ⑤ お帰りになってから自分で挑戦できる

を前提にテーマを検討しました。

3 テーマの設定

テーマを検討する中で、NHKの「趣味悠々」という番組でも紹介された四つ目とじ（図2）などの和とじの本作りが良いのではないかと、という一案が出されました。

図2 四つ目とじ



前提条件を満たしていますし、なにより楽しそうです。問題となるのは、講座の時間が90分

しかないこと。千枚通しで目打ちしてとじ紐で結える和とじが90分という時間の中で収まるのかかなりあやしい。まして参加者に体験いただきながら、ということが可能なかどうか検討しなくてはなりません。そこで和とじよりは制作が易しい折本も第二案として同時に検討してみようということになりました。

ところで、講座を担当する面々は「プロジェクト」チームの名の表すとおり、それぞれの日常業務をこなした上でこのプロジェクトに参加しています。図書館は土・日・祝日も開館しておりますので、職員はそれぞれ出番・非番・出勤時間・退勤時間が違います。全ての事柄を皆で同時に検討することはできません。メンバー全員が一同に集まることができるのは数週間に一度、1時間程度が限度です。必然的に、時間を要する検討事項はメンバーがそれぞれ持ち帰り、試行錯誤の上で会議に持ち寄るスタイルで準備を進める形となりました。私はひそかに「宿題スタイル」と名付けていました。

宿題をこなしていくうちに、やはり四つ目とじなどの和とじではどうやっても90分に収まりきらないことが判明しました。対する第二案の折本は、工程を工夫してできるだけ簡略化していくことで90分にぎりぎり収まるだろうということがわかってきました。そういうわけで私たちの講座は「折本について」でいく、ということに決定しました。

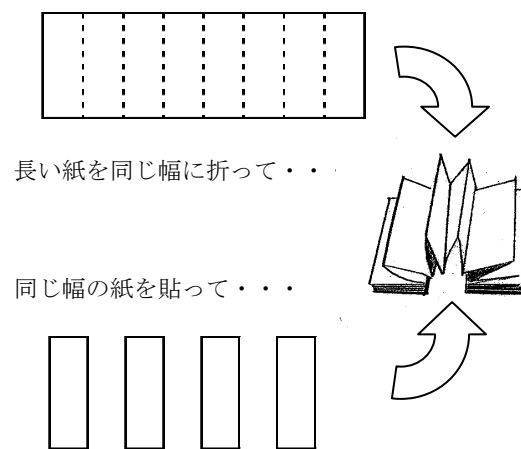
4 講座の内容と時間配分

最初にご紹介しましたとおり、折本とはもと

もと巻物の用紙を巻かずに一定の幅で折りたたんだ本です。

「一定の幅で折りたたむ」ことで作れるということは「同じ大きさの紙を貼り合わせて」でも作れるということが少し考えるとわかります（図3）。折本作りや和とじの本作りに関する資料でも紙を貼り合わせる方式が多く紹介されています。

図3 折本のつくりかた



参加者の皆様の利便性を考えると、長い紙を折って・・・という方法よりは、同じ大きさの紙を貼って・・・の方が日々の暮らしに応用できそうです。「同じ大きさの紙」の一番身近なものは「官製はがき」でしょう。私の例で恐縮ですが、年賀状などは結構な数が届きますし保存も大変。机まわりが毎年えらいことになってしまいます。これを格好良くきれいにまとめておけるとなるとうれいだろう、と。年賀状がもうすぐ届く、という時節柄（講座は11月15日でした）講座の内容をすぐ実行に移せていいじゃない！ということになりました。

必要な作業は大まかに

(1) 同じ大きさの紙 (はがき) を貼り合わせる
(本の頁づくり)

(2) 表紙をつける

となるのですが、90分の中でこれを行うための
時程は、極力作業時間を多めにとったとしても、

準備物の確認 : 5分

概説 : 5分

作業① (頁づくり) : 50分

休憩 : 10分

作業② (表紙づけ) : 20分

程度になります。全ての工程をこの時程内にま
とめるには、

- ・ 貼り合わせるはがきは20枚程度まで
- ・ 表紙は官製はがきの大きさがカバーできるよ
うあらかじめこちらでカットして準備

ということにしないと間に合わないのは、例の
「宿題スタイル」にて制作してきた経験上明らか
です (余談ですがチームのメンバーがそれぞ
れ制作した試作品数は40近くになりました。中
には明らかな失敗作や何かにチャレンジした意
欲作?もありました。出来のいいものは講座当
日に制作例として展示しました。)

そんなわけで、当日の講座に際しては、参加
者の方々に

- ① はがき20枚
- ② カッター
- ③ 定規

の3点を持参していただくこととして、はがき
を貼り合わせるテープと、表紙にする紙はこち
らで準備しておくことにしました。

5 当日の運営方法の検討

テーマ・準備物・時程まで決まりました。今
年度の県民大学への参加申し込み数は35名でし
たので、この方々が全員参加した場合を想定し、
参加者の方々にわかりやすくプレゼンテーショ
ンをするための方策を検討しました。

講座全体を運営する司会等を除くとスタッフ
1名が参加者5~6名にガイダンスする勘定に
なります。それでいて各グループの作業内容に
ばらつきが出てはいけません。スムーズに運営
しながらも、参加者によってばらつきのない講
座内容とするために二つの課題がありました。

I : 難易度の高い作業をわかりやすく行うに
はどうしたらよいか

II : 参加いただく方々すべてにスタッフがガ
イダンスを実施する方法はあるか

課題 I の解決策として

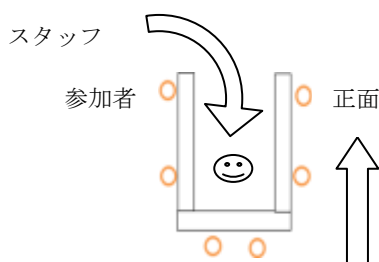
- ・ 実物投影機のライブ映像をご覧いただきな
がら作業していただく

ことにしました。作業者が実演する様をスクリ
ーンに投影してご覧いただくことができます。
作業する手元が大写しになりますから、難易度
の高い表紙づけなどの様子も文字通り一目瞭然、
工程の説明が容易かつスムーズになりました。

ここで問題となったのが机の配置。参加者の
皆様がすべてスクリーンに対して背を向けない
配置が必要で、かつ作業スペースも確保できな
くはなりません。そこで「コ」の字を横倒し
したような机の配置 (図4) を採用しました。
こうすると参加いただく方は常にスクリーンを
確認できますし、作業スペースもあります。

参加者は最大35名ですから「コ」の字型の机1グループに6席を準備し、これを6グループ準備します。6(席)×6(グループ)=36(名)で十分対応できます。スタッフも総勢8名から司会1名、実演1名を除いた6名が各グループのガイダンスに当たることができます。

図4 机の配置図



また、こうした机の配置をとることで課題Ⅱも解決できることがわかりました。「コ」の字の口が開いた所からスタッフが間に入ることができ分かりづらい部分はスタッフがガイダンスする態勢をとることが可能だからです。

全体的な工程の説明はスクリーンにてライブ上映するわけですから、グループにより作業内容にばらつきが出ることもありません。

これで、均質的で目の行き届いた講座運営ができます。ここまで決まったところで準備は完了。あとは講座当日を迎えるのみとなりました。

6 講座当日

多数の方にご参加いただき、当日の講座は参加していただいた方々の大事なお手紙を損じることなく、成功裡に混乱なく終えることができ、安心いたしました。また、「この講座を楽しみにしていました」というありがたいお言葉も頂戴

いたしました。スタッフ一同御礼申し上げます。

講座で体験いただきました折本は、同じ大きさの紙がある程度、そして表紙となるものがあれば簡単に作ることが出来ます。応用の幅はかなり広く、すぐに思いっただけでも年賀状ブック、絵手紙の作品帳、撮りためた写真でのミニ写真集、細長い紙で俳句帳、お子さんやお孫さんの描いた絵を使ってのオリジナル絵本などが作れそうです。どなたかと一緒に折本作りをすれば鮮明に記憶にも残ることでしょう。アイデア次第で可能性は無限大だと思います。

図書館では手づくり製本の楽しみ方などについての関係資料も所蔵しておりますのでご活用いただければ幸いです。



写真
作業者の手元を拡大投影+スタッフのガイダンス

7 おわりに

私たちが日常的に目にするものは、そのほとんどが洋装本だと思います。けれど、本の歴史をひもとけば洋装本は明治時代以降の形態であり、それまでは折本などの和装本が中心であったことがわかります。形態が違えば制作方法も異なります。しかし、そこに共通するのは「後世に残す」ことだと、今回の折本作りを通して感じました。

物を作るということは「残す」こと。今回の

講座は、消費することに慣れ切ってしまった現在の暮らしぶりを顧みる良い機会にもなったの

だな、と講座運営を終えたいと思っています。
(そね・あきら)

伊達文庫蔵『環海異聞』のものがたり

——資料の価値再発見の取り組みについて——

宮城県図書館調査班 内馬場 みち子

1 はじめに

『環海異聞』は仙台藩の漂流民・津太夫ら4名が文化元年(1804)、ロシア使節レザノフに伴われて帰国したことを受け、仙台藩第九代藩主・伊達周宗の命によって同藩の蘭学者・大槻玄沢が儒学者・志村弘強と共に彼らに聴聞を行い、執筆編纂し、文化4年(1807)に完成せしめたものである。津太夫らは、その後、長く歴史に埋もれることになったが、彼らこそ世界一周した初めての日本人であった。

『環海異聞』は同年秋、伊達家に献上された。本館では、仙台藩主・伊達家旧蔵書「伊達文庫」に『環海異聞』15巻首1巻16冊を所蔵している。本書については、平成16年度に「22世紀を牽引する叡智の杜づくり事業」の一環である「宮城県図書館貴重資料専門調査事業」において学術専門調査を行い、その結果、平成17年7月26日に宮城県有形文化財(書跡典籍)の指定を受けた。調査では仙台市博物館・前館長の濱田直嗣氏が専門調査員をつとめた。

本稿において、本館所蔵『環海異聞』について、概要、来歴、受入の経緯などを記したい。



本館・伊達文庫蔵『環海異聞』(県重要文化財指定)

2 津太夫らが果たした世界一周と

大槻らによる『環海異聞』執筆の経緯『環海異聞』成立の経緯は次のようなものである。

寛政5年(1793)11月27日、石巻湊から仙台藩の廻米、用木を積んだ千石船「若宮丸」が江戸へ向けて出帆した。同船には仙台領宮城郡寒風沢の水主・津太夫、桃生郡深谷室浜の太十郎、牡鹿郡石巻の沖船頭・平兵衛、水

主・善六ら 16 名が乗船していたが、激しい暴風に見舞われ遭難、アレウト（アリューシャン）列島中の島に漂着した。

漂流民となった一行は、オホーツク、ヤクーツクを経てイルクーツクに至って、ここに 8 年余滞在した。享和 3 年（1803）、ロシア帝国（ロマノフ朝）の首都、ペテルブルグに到着し、アレクサンドル I 世に謁見。同年 6 月、帰国可能な 4 名が送還されることになり、レザノフを使節とする遣日ロシア使節団に同行することになった。

使節船はデンマーク、イギリス、カナリア諸島、ブラジル、マルキーズ諸島、ハワイ諸島、カムチャツカを経て、文化元年（1804）に日本国長崎に到着した。津太夫らは遭難から帰朝まで 12 年もの歳月を要しており、前述のとおり、結果として彼らははじめて世界一周した日本人となった。

文化 2 年（1805）、大槻玄沢、志村弘強は仙台藩・江戸藩邸において津太夫らに 40 日間ほどの聴聞を行い、本書の執筆を開始、多方面から協力を得て校訂を重ね、文化 4 年（1807）に脱稿をみた。

『環海異聞』の書名の由来については、序例附言に次のように記されている。

「耳を飛し目を長ふするの新話珍談共なり、地は北亜墨利加（アメリカ）洲の属島に始まり、亜細亜（アジア）洲、欧羅巴（エウロッパ）洲、阿弗利加（アフリカ）洲、南亜墨利加洲の五大洲方を遍歴して、地球の四面環海一周し驚涛九

万里を凌ぎ、再我東方に帰朝せしは、前代未聞未曾有の一大奇事にして上下古今剖判（ヨガヒラケテ）三千年来絶えて無き所の奇話異聞なり。

命を受て此編環海異聞と題せしもこれか故也。」

津太夫らによる「四面環海一周」、すなわち世界一周は、当時の鎖国下にあった社会情勢では「前代未聞未曾有の一大奇事」として受け止められ、大槻はその驚きを序例附言に残した。そして「四面環海一周」から同書が『環海異聞』と名付けられた。

『環海異聞』が誕生したその時代、ヨーロッパ各国は海外進出を試みつつあり、わが国を取り巻く情勢にも緊張が高まりつつあった。

ロシアが使節レザノフを派遣した目的は日本との通商を求めることにあり、一方で北方地域においてロシアとの間に紛争が勃発しており、外交関係の正常化を図ろうとするものだった。結局、レザノフの通商交渉は実らず、その後、文化 8 年（1811）にはゴローニン・高田屋嘉兵衛事件が起きている。

『環海異聞』はこうした時代の社会情勢、出来事に反応して広く流布し、多数の写本が現存する理由はここにあったとも考えられる。

同時代に生まれた同種の資料には『北槎聞略』、『蕃談』、『時規物語』などがあり、当時、世界の情勢を知るうえで重要な情報源となったと推量できる。比較して、『北槎聞略』は幕府に奉呈されたあと官庫に収まったためか、転写されて世にでることが少なかったよ

うで、現存する部数は少ない。ちなみに、国立公文書館内閣文庫蔵の『北槎聞略』は平成5年（1993）に国の重要文化財に指定を受けている。

3 伊達文庫蔵『環海異聞』の構成と内容

本館伊達文庫に収蔵する『環海異聞』の構成、内容等は次のとおりである。

(1) 書誌事項

環海異聞 15 巻首 1 巻

大槻茂質・志村弘強／著

写本 16 冊 27.2cm

印記：伊達伯観瀾閣図書印

請求記号：KD299-カ1

(2) 構成

本書は15巻首1巻16冊で構成される。首1巻（第1冊目）には序文と目次がある。各巻の表題、挿図の名称、丁数は下記のとおり。

序例附言 目録 「文化四年丁卯夏 医官大槻茂質謹識」 42丁

《挿図》①(魯西亜使節船本朝へ渡海せし船路於長崎書キケしといふ略図

巻一 表題なし 34丁

《挿図》①オンデレイツケ島穴居並嶋人其土室江出入之図 ②コージキ図 ③オクチョ鳥之図

巻二 ナーツカ滞留記事之二 屋和都蛤(オホ

ーツカ) 33丁

《挿図》①島人男女並少女之図 ②額上頭圍にはめる冠り物之図 ③鼻飾り耳飾り図紡鍾之図 ④セイウチ図 ⑤嶋人頭まで被る皮衣を着皮船ニ乗りモリを使い漁をなす図 皮船全図、モリ全図、モリを使う手法の図、頭?冠る皮衣全図。⑥ナアツカ魯西亜人居処図。⑦氷山図(帆船) ⑧オホーツカ家屋図 ⑨犬に荷を積たる雪車を為牽ズ ⑩旅行用意せし人の図 ⑪馬に荷を駄したる図。

巻三 匣歌都蛤(ヤコーツカ) 伊尔歌都可(イルコーツカ) 街衛居室第一 33丁

《挿図》①1人の乗りたる馬車(ソリ)を四匹の馬にて河氷の上を牽する図 ②セイチカ図 ベイチ之下地図 ベイチ全図 ④椅子図 ⑤浴室図 浴者の登る店の図 焼石に水をソソギ湯気を蒸出す図

巻四 飲食第二 服飾第三 34丁

《挿図》①牛肉等を入れて□に入れ煮る瓶の図 ②食盤三ツ道具図 ③漂客帶來冠帽衣服諸図(革帽子 メリヤス頭巾 フリパーシカ ガミゾー フハイカ ガミゾ フリバシカ シタノイ シネリ チョロケ シャーカ ポロケンツケ フチセアラ サラサ蒲団)

巻五 寺観道教第四 寺並宗 産育及赤子命名第五 婚礼第六 34丁

《挿図》①鐘楼図 鐘楼の内にて数々の鐘を手足にて拍子よくふりならず図 ②院之図

大寺表面図 同堂内図 ③アリヘレイ帝より賜る冠帽図 ④転車の斗に人を乗せて回転する戯の図

卷六 葬礼第七 祭礼第八 衛庁並官名職掌政治兵卒武備第九 刑獄第十 錢貨第十一 36丁

《挿図》①(鉄砲を持つ歩卒) ②(コイン図)

卷七 尺度並里程第十二 秤量第十三 樂器第十四 気令第十五 耕農第十六 交易第十七 医療第十八 物産第十九 数量第二十 土俗風習第二十一 34丁

《挿図》①(秤図) ② 樂器図(ゴーシケ、トウチカ、ケレプコ、パライカ) ③ソーボリ貂鼠図

卷八 言語第二十二 30丁

《挿図》①ハナレ(燭台、提燈図) ②十露盤図

卷九 伊尔歌都蛤 発軫 伯多?蒲尔弧道中記(イルコーツカ ホツソク ペトルブルグに至るどうちゅうき) 36丁

《挿図》①車馬図 ②風扇(かざぐるま)之図

卷十 国王江目見以来之次第 32丁

《挿図》①魯西亜当国帝夫婦肖像 ②シヤリ図 ③風船飛走図 ④(天地大球の図)

卷十一 都府滞留中之記二 34丁

《挿図》①街衛図 ②(国王の御涼み所 鉢植

物之室)③(いくつも枝垂れて根となりし異木) 蘭書所載根樹(ウヲルテルボーム図) ④市中大戯場図 ⑤(ペテル バイトロ バウロイチ 騎馬像) ⑥(宴会に小人を見る図) ⑦加那斯達 湊築出しの図

卷十二 本船出帆並帰朝洋中之記 33丁

《挿図》①(ココス(椰子)図) ②(亀に似たる魚) ③ ガルカルゼル(鰐)図

卷十三 帰朝洋中之記 31丁

《挿図》①鯨器図(いれずみどうぐ) ②島人男女図 ③マルケイサ嶋船図 ④サンペイツケ嶋人男女図 ⑤バウラッケガワ湊図

卷十四 長崎着岸より上陸以来迄之記 36丁

《挿図》①(船頭部屋飾り付け図) ②長崎湊口図 ③魯西亜国船印小旗図 ④魯西亜船入津図 ⑤魯西亜人客館図 ⑥ニコラレサノット像 ⑦上案針役ラートマフ像 ⑧歩卒像(前後) ⑨冠帽諸図 ⑩オオストロ 鎗図

卷十五大尾 雑事 船中並長崎滞留之中見聞 雑事 補光太夫雑話 68丁

《挿図》①(オロシア本領惣図) ②抜乙蛤鹿(バイカル)湖漁獵図 ③新造軍船図 ④(豪商キセロフ水車場所)

(3) 挿図

同書には彩色画(一部墨画)115図が収録されていることもその特色の1つとなっている。

大槻は次のように記している。

「此紀聞愚陋無識の雜民等、彼魯西亜本地に入り且帰帆せる海路の如きも、徒に妄見盲聞する所にして其詳審を得ず、疎漏なる事のみ多し。これ已む事を得ざる所也。茂質其次テを以て問を緊要なる事を起せば、更にこれを答ふるに及はず。実に靴を隔て痒を搔くか如き事毎々少からず。故に唯其憶記して説話せるまを雜録せるなり。これ公命を疎漫にするに似たりといえへとも、為方なき所なり。且其説く所解すへくして解すべからず。又解するに似て殆んと筆舌の逮はさるものあり。故に一日門人某画事に意ある者を伴い至り、其いふ所に就て傍ら図状をなさしめ、且問ひ且訂して遂に数十図を成せり。是を以て毎条下に添ひ、稍ニ其大要を得るに似たり。（中略）但其衣服図等の如きは帶來の真物を写真せるなり。」

すなわち、『環海異聞』の挿図は、編著者である大槻玄沢らが津太夫らに聴聞を行った際に同伴した絵師が、津太夫らの話から想像し、かつ、大槻らがさまざまな文献から補って描いたものであることがうかがえる。

聴聞作業では隔靴搔痒の感を伴ったとの述懐もあり、大槻らにとって津太夫らの話だけでは判然とせず、補足は挿図以外の部分についても行われたと推量できる。私説だが、大槻らは『環海異聞』の編纂にあたり、津太夫らの話に寄託しつつ、海外事情に関する最新の情報としての集成を試みたとも考えられる。



伊達文庫蔵『環海異聞』（県指定有形文化財）；ロシア皇帝夫妻の図（写本によって図の描かれ方が違い、評価のものさしになっている）

なお、上記の挿図は当時のロシア皇帝・アレクサンドル I 世夫妻を描いている。津太夫らは同国にて皇帝夫妻の肖像画を入手（購入）して持ち帰っており、絵師がそれを写して描かれたものであるが、写本が重ねられるに従って彩色の有無に違いが出たり、髪型もさまざまに変化している。これらが善本であるかどうかを評価する手がかりの一つになっている。

4 伊達文庫の来歴と整理の経緯

本館所蔵『環海異聞』は特殊コレクション「伊達文庫」に収蔵されている。その来歴は昭和 24 年（1949）12 月に、本館が仙台藩主・伊達家からその所蔵資料を購入したことによる。

「伊達文庫」は仙台藩の歴代藩主が収集した蔵書と『伊達治家記録』『伊達世臣家譜』などの藩政資料によって構成され、資料総数は 4,170 点（29,681 冊）にのぼり、本館最大規模の特殊コレクションとなっている。

伊達文庫の整理は、入庫の翌年、昭和 25

年（1950）1月、本館職員であった半沢今朝治を中心に開始され、8月には入庫を記念して「伊達文庫の貴重書展示会」が開催された。しかし、その解題目録に『環海異聞』は見当たらない。

昭和29年（1954）に半沢が退職すると、伊達文庫の整理は亙理悟郎がその後を継いでいる。伊達文庫蔵『環海異聞』に関する記録は、「宮城県図書館古書台帳」第4冊51項に残されていた。

「昭和35年3月 登録番号／33520 から33535 書名／『環海異聞』 大槻茂質 写本 和大 請求記号／2 受入種別／購入 適用／伊」

また、同書「目録カード」は次のように記述されている。

「環海異聞 大槻茂質著
写本 和大 序例附言共16冊
請求記号／伊299 1-16
登録番号／昭和35年3月受入33520-33535
(伊達伯観瀾閣図書印ノ印記アリ)

内容：寛政5年の冬仙台の船子 津太夫、儀平、左太夫、太十郎の4人奥州岩城の海上にて暴風に遇ひ、遂に魯西亜に漂着して文化2年まで彼地に居て12年を経て漸く帰りたる間の経歴を記したるものなり。彼等帰朝の際、陸奥侯より大槻茂質、志村弘強の二臣に命じ

て、其始末を聞書せられたるものなり。漂流記中の確實精細あるものなるべし。

以上、本館「古書台帳」「目録カード」の記載事項から、伊達文庫蔵『環海異聞』の登録、受入の時期は、昭和35年3月であることが確認できた。入庫からほぼ10年後のことである。

その後、伊達文庫の整理については郷土資料は継続されたものの、昭和37年（1962）には新刊の未整理図書が増加などにより、和書約600点、漢籍約700点、古文書などを未整理のまま残して中断している。

整理作業の再開は、昭和56年（1981）4月、本館創立100周年記念事業の1つとして漢籍総目録の編集刊行が企画されるまで待たなければならなかった。『伊達文庫目録』の編纂事業も同記念事業の一環としての位置付けを得て、ようやく昭和59年（1984）4月から進められることとなり、3年後の昭和62年（1987）、同目録はついに刊行をみた。

ここに、本館伊達文庫収蔵『環海異聞』の書誌事項が公開された。入庫から38年の時が経過していた。

5 伊達文庫蔵『環海異聞』のたどった道とその評価

本館が伊達文庫に収蔵する『環海異聞』には、「伊達伯観瀾閣図書印」が押印されている。同印記は、「伊達伯」とは伊達家の総本家の意で、「観瀾閣」とは伊達家の堂号のことである。

仙台藩主・伊達家の蔵書は明治維新の混乱

を潜り抜け、明治29年(1896)には、旧仙台藩士、作並清亮さくなみきよすけら有志が仙台藩関係資料の収集を進めて設立した「仙台文庫会」(同会設立は明治26年)に寄託された。東京大井の江戸藩邸にあった蔵書は、品川駅から5トン貨車を借り切って仙台に輸送されたと伝えられている。

寄託に際して、伊達家はその蔵書が「伊達家所有」であることを記すために、「伊達伯観瀾閣図書印」を押印した。

仙台文庫会に寄託された図書については、『観瀾閣蔵書目録(伊達家蔵書目録)』が作成されている。伊達家蔵の『環海異聞』について調べてみると、同書16冊が同目録「壹」の「雑史」に分類され記載されている。また同項には、大槻玄沢が『環海異聞』には記せなかった、漂流民の生の証言などを記述した著書『北辺探事』の書名も記されている。

その後、仙台文庫会は明治37年(1904)に解散し、寄託図書は再び伊達家に返却され、本館に収蔵される時を静かに待つこととなった。

本館が、仙台藩主・伊達家蔵書を購入により収蔵したのは、昭和24年(1949)のことである。本館は特殊コレクション「伊達文庫」を創設した。

本館伊達文庫の『環海異聞』と大槻玄沢の献上本との繋がりについては興味が尽きない。

『環海異聞』の善本は、国立公文書館内閣文庫本、早稲田大学図書館大槻文庫本、大阪愛日文庫本、京都大学本、一関博物館本などが知ら

れている。それらは和綴じ本、16冊、彩色挿図で体裁はほぼ共通している。本館伊達文庫蔵『環海異聞』も同様の体裁となっている。

大槻玄沢らが脱稿して間もない文化4年(1807)秋、仙台藩に献上したといわれる遺品の現存確認ができない現状にあつて、伊達文庫『環海異聞』は「伊達伯観瀾閣図書」に属していたという経緯から、献上本に次ぐ位置にあるとも推量されている。

『環海異聞』の翻刻、解説書としては、『環海異聞』(校訂漂流奇談全集 石井研堂/校訂博文館 1900年刊)、『環海異聞一本文と研究一』(杉本つとむ他/解説 八坂書房 1986年刊)、『環海異聞』(海外渡航記叢書第2巻 池田皓/訳 雄勝堂出版 1989年刊)などが出版されている。

各々の底本は、石井氏は自身の所蔵本を用いた。杉本氏は「内閣文庫所蔵本」を採用しているが、「今回も内閣文庫蔵本(5本を蔵する)の1本を選んで翻刻したが、特に善本ということからではない。身近にあり、挿絵も完備し別の参考資料もあり、保存も比較的良好というような点から選んだものである。」と序文に記している。

池田氏は「宮内庁書陵部所蔵本」を採用しているが、序文で「いずれにせよ早大本が藩公に奉呈された原本であるのか、伊達家に奉呈本が現存するのか、それが明らかとなり、何時の日にか原本が完全な姿で世に出ることを期待するものである。」と述べている。

6 むすび—津太夫らのその後と歴史の記憶
大槻らの聴聞を終えたあと、津太夫ら4名の漂流民は赦されて生まれ故郷に帰ることが出来た。津太夫と左平は寒風沢島（塩釜市）に、儀兵衛と多十郎は室浜（東松島市）へとようやく帰ってくる事ができたのは文化3年（1806）のことであった。

しかし、当時、鎖国下にあつて、遭難ののち、ロシアにたどり着き、四面環海一周、すなわち世界一周したことなど、固く口外を禁じられ、故郷の人々にも知らされることはなかったであろう。津太夫ら漂流民の事蹟は歴史の波間に、次第しだいに消えていった。そして本稿に記述してきたとおり、彼らの見聞をまとめた『環海異聞』も時代が下るなかで、埋もれてしまった。

今日、津太夫らが帰朝して200年余が経つ。平成18年（2006）には津太夫らの事蹟を顕彰しようと、塩釜市において、塩釜市と「NPOみなとしほがま」など有志団体主催による記念事業が催された。続いて、同NPOは平成20年（2008）3月に学校教育用の副読本として『鎖国の時代に世界一周した若宮丸の津太夫と左平』を刊行し、同年12月には本館所蔵『環海異聞』の影印本を作成している。

これらの地域の事業にも、本館長期ビジョン「叡智の杜づくり事業」に基づいて実施された本館所蔵『環海異聞』に関わる専門調査、県有形文化財への指定など、史料価値再発見の取り組みがいささかであっても貢献したと思われる。そして、郷土の歴史が地域の人々

を勇気づけたと実感してもいる。

※※※

本稿は平成20年度「みやぎ県民大学図書館開放講座／叡智の杜をたずねて」の第4回「みやぎの叡智の源流を訪ねて」において講義した内容に基づき、執筆した。

<参考文献>

- (1) 『環海異聞 本文と研究』大槻玄沢・志村弘強編 杉本つとむ他解説 八坂書房 1986年
- (2) 『環海異聞』（海外渡航記叢書2）大槻玄沢・志村弘強編 池田 皓訳 雄松堂出版 1989年
- (3) 「環海異聞、奥州名所図会、仙台東照宮御祭礼図、仙台藩美術資料等について」濱田直嗣著 『平成15年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書』 宮城県図書館 2006年 p.18-29所収
- (4) 同 『平成16年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書』 宮城県図書館 2007年 p.22-34所収
- (5) 「『環海異聞』の知られざる善本」 海野一隆著 『東洋地理学史研究 日本篇』 清文堂出版 2005年刊 p.116-124所収
- (6) 『宮城県図書館 伊達文庫目録』宮城県図書館 1987年刊

（うちばば・みちこ）

「時代に睨まれた本たち—もう一つの貴重資料—」実施報告

宮城県図書館企画協力班 尾島 恵

平成 20 年 11 月 29 日（土）にプロジェクト 22 の取り組みとして「時代に睨まれた本たち—もう一つの貴重資料—」を県民大学で実施しました。

1 プロジェクト 22 C チームメンバー

梶本哲弥（調査班）、只野雅美（調査班）
田中亮（調査班）、阿部毅（利用サービス班）
洞口薫子（利用サービス班）
一條ちか江（利用サービス班）
加藤奈津江（総務班）、尾島恵（企画協力班）

以上 8 名で計画・実施しました。

2 準備

テーマ決めにずいぶん頭を悩ませました。そんな時、ふとしたことで話題にのぼった『ちびくろサンボ』の話から、本館で所蔵している「発禁本」を紹介してはどうだろうか？本と歴史の関係を考えてみよう、という事になり、このようなテーマに決定しました。いざ書庫に発禁本を探しに行ってみると、数はそれほどない…という事がわかりました。ある事はあるのですが、戦前のいわゆる「風俗壊乱」の類の本ばかりな

のです。また、戦後の現憲法下では検閲が禁止されているため、「発禁」自体が原則存在しません。また、人権侵害・著作権侵害等で裁判所から出版が差し止められた資料、というのも数点しかありませんでした。本を紹介するのにはあまりにも数が少ない、という事で、発禁の背景にある時代の流れと本の出版の歴史に視点を置く事としました。

3 近現代編

まず、発禁本に関する蔵書について、国立国会図書館と本館の二つの例を取り上げました。

次に、明治から昭和 20 年までの出版に関する法的規制とその実例の紹介です。明治 26 年の出版法には「『安寧秩序』を妨害し、『風俗を壊乱』するような場合は発売を禁じ、その原稿や本を差し押さえることができる」と書かれています。検閲によって不適切と判断された場合は、「発売禁止」「伏字」「切り取り」等の方法で処分を受けたわけです。

昭和 21 年、日本国憲法が制定され、その第 21 条で「表現の自由」と「検閲の禁止」が定められました。戦前のように政府の方針によって出版が禁じられることはなくなりましたが、全

ての書物が無制限に流通するというわけでもありません。有名な事件として三島由紀夫の『宴のあと』と柳美里の『石に泳ぐ魚』について紹介しました。



左より
『逐条憲法精義』(美濃部達吉)
『輪廻』(森田草平)
『中央公論』(『宴のあと』掲載)
『新潮』(『石に泳ぐ魚』掲載)
『ちびくろサンボ』

そして、裁判になったわけでもなく、ある日突然書店から姿を消した絵本、『ちびくろサンボ』についての紹介です。これは1898年にイギリス人女性ヘレンバナーマンによって作られた本です。日本では1988年に大阪の小学生の男の子からの指摘をきっかけとし、『ちびくろサンボ』は黒人への人種差別ではないか？と非難運動が始まります。その後、問題点を改めた改良版が次々と出版されましたが、非難運動に対する反論もあり、現在は原著と同じものが復刻出版されています。

4 江戸編

江戸時代は幕府が学問を奨励し、教育の普及とともに識字率が上昇した時代です。また製版印刷の発達に伴い、本の大量生産が可能となり

ました。

そんな中、8代将軍吉宗の時代に出版取締令が出されたのです。根拠不明の勝手な説、好色本、人々の家筋や先祖に関する憶説、作者や出版者の明記されていないもの、徳川家に関するもの、以上のものを禁止しました。これは幕末まで遵守される法令となるわけです。

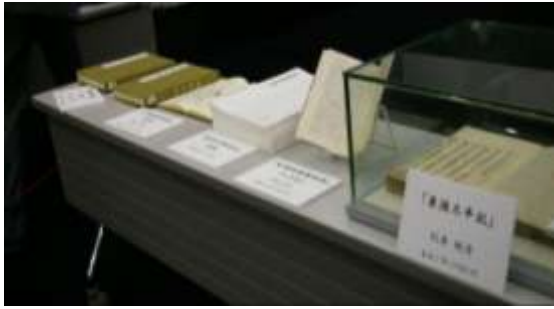
次に偽書とされている『先代旧事本紀』(別名『旧事大成経』)についてです。これは志摩国伊雑宮こそ天照大神を祀る神社である、という神話を伊雑宮関係者が禅僧潮音と永根采女に依頼し偽作したものです。幕府は天和元年(1681)に禁書に指定し、全国社寺関係に回収の命を下しました。

続いて林子平と『海国兵談』についてです。「親も無し 妻無し子無し版木無し 金も無けれど死にたくも無し」

これは林子平が自らについて読んだ歌です。

子平は寛政3年(1791)に幕府の海防不備、具体的に江戸湾の無防備状態を指摘した『海国兵談』を出版します。これは海防の必要性を訴える軍事書でしたが、幕府を批判した内容とみなされてしまいました。松平定信の寛政の改革が始まると、子平は幕府から睨まれ、版木を没収されるとともに禁固刑に処されます。その時の心境を詠んだのが上記の歌です。

しかし、子平は密かに別に版木を作成し、所持していたため、今現在でも『海国兵談』を目にすることができるわけです。



左より
『海国兵談』、『三国通覧図説』（林子平）
『先代旧事本記』（不明）
『当時珍説要秘録』（馬場文耕）
『東国太平記』（杉原親清）

5 県民大学を終えて

歴史と本のか関係を考えてみたいという事が始まったこの講座で、「発禁本」の存在に出会ったことは、図書館職員としての新しい発見につながりました。

「発禁本」と言われる本は、どれも書庫の奥

にひっそりと置かれていました。過去の歴史の中で、時代の権力に睨まれ、一度は封印された本たち。その本をもう一度目にすることができるのは、本当に奇跡的なことのように思います。

私達は、今でこそ好きな本、好きな資料を手に入れることができます。しかし、社会情勢・時代の流れの中で、本を自由に読むことができなかった過去の歴史を忘れてはいけないと感じました。

この県民大学を通して、あらたな観点で本と向き合うことができたことはとても価値のあることでした。そして、「時代に睨まれた本たち」、その意味をよく理解し、未来に伝えてゆく。それが私達、図書館職員に課せられた責務の一つではないかと思っています。

（おじま・めぐみ）

「子どもの本展示会」について

宮城県図書館利用サービス班 洞口 薫子

昭和45年から始まった「子どもの本展示会」は、平成20年度で39回を迎えた。この展示会は、前年一年間に出版された子どもの本の中から本館で所蔵しているものを展示することで、公共図書館・公民館図書室・学校図書館・一般家庭など、子どもの読書環境を支える場に関わる方々に直接本を手にとりいただき、子どもの本を取り巻く現状を知っていただくとともに、本の選択・購入の参考に資することを目的とし

てはじまった。

2回目の展示会からは、新刊書の展示に加え「童謡」（第7回）「子どもの喜ぶ絵本」（第9回）「子ども向き伝記を考える」（第10回）などのように特集テーマのコーナーも併設するようになった。テーマは児童文学の各ジャンルにわたり、それぞれの分野の現状に対する研究・分析も行われていた。また5回目の展示会からは、県内の市町村・公民館図書館に展示資料を貸出

す「移動展示会」が始まった。

11回の展示会では「子どもの読書環境を考える」と題し、小学校221校・中学校100校・県下の全公私立高等学校を調査対象とした分析を行っている。昭和29年4月に学校図書館法が施行されて25年が経過してもなお、専任司書の設置率は全国平均を大幅に下回っていることなどがあげられている。

個人的に興味を抱いたのは、低学年に対する利用制限を設けている小学校が21%あるという記述だった。私の通っていた小学校でも3年生になるまでは学級文庫の本しか借りられず、図書室への入室もできなかったという記憶がある。

昭和50年代、私は東十番丁に住んでいたため、親に連れられ榴ヶ岡にあった県図書館によく足を運んだ。当時は児童室も無く、いつもひっそりとしていて「大人の場所」という雰囲気が濃く漂っていた。今の子ども図書室ののびのびとした様子と比べると、天地ほどの差がある。もちろんそれは宮城県図書館に限らず、当時の公共図書館のどこにあっても同様だったのだろうけれど。

そうした日本の子どもの読書環境が大きく変化するのは平成12年のことである。「国際子ども図書館」が開館したのを機に、国会で「子ども読書年」が制定され、翌13年には「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定、また14年には「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が策定された。この一連の動きに応ずるように、平成9年を境に減少傾向にあった

児童向け図書の新刊書の出版点数は、再び増加の傾向に転ずるようになっていった。また「ハリーポッター」や「ナルニア国物語」「チョコレート工場の秘密」など児童書を原作とした映画のヒットにより、親子で楽しめる児童書の存在が脚光を浴びるようになってきた。また大人向けの絵本の出版も増え、大型書店に大人向け絵本のコーナーが設置されるようになった。

宮城県では、県図書館が平成10年に現在の紫山に移転し「子ども図書室」が設置され、利用者の方への児童書の直接的なサービスが始まった。その後、平成16年に宮城県は「みやぎ子ども読書活動推進計画」が策定し、平成20年度までの5年間の子どもの読書活動を推進する方策と取り組みをまとめた。

そうした動きを受けて、平成16年の特集は「読み聞かせ関係の本」「集団読書関係の本」だった。平成18年からは「赤ちゃん絵本」が毎年50冊展示されるようになり、乳幼児からの読書に対する関心が高まってきたことが伺える。展示会場には小さいお子さんを連れた保護者の方が気軽に読み聞かせをできるように、畳を敷いたスペースも準備している。



今年度の開催は4月19日（土）から4月30日（水）までの10日間で、4月23日の「子ど

も読書の日」を実施期間内に挟むように企画され、入場者数は796名（80人／日）だった。

展示しているのは、前年に刊行され本館が所蔵するうちの1500冊の図書・研究書50冊・企画本100冊・赤ちゃん絵本50冊である。

今年度の企画本のテーマには「食育」を選んだ。宮城県では、乳幼児の食生活や生活リズムを整えることで子どもの健やかな成長を支えられるよう、「はやねはやおきあさごはん」の歌をつくり、その理念の普及に努めてきた。また、2005年には食育基本法が成立し、子どもの生育と食生活の重要性にあらためて注目が寄せられるようになってきた。食育基本法においては、料理教育にとどまらず、食に対する心構えや栄養学、伝統的な食文化についての総合的な教育も「食育」の範疇に含めている。

そうした子どもの食環境をめぐる様々な活動を受け、読書を通して保護者自身が食に関する知識を習得し、また子どもたちが自らの食を自分で選択する判断力を身に付けることができるような本を選び展示した。そのため、子ども向けの食育絵本のほか、野菜の育て方や伝統食の作り方、世界の食文化を紹介する本なども会場に準備した。



平成21年度の企画本のテーマは「朝読書」である。20年以上前に千葉県の高校で始まった朝読書は、中学校・小学校にまで広まり、9割近くが実施している県もある。読書の普及というよりは、始業前に落ち着いた時間を持つことで授業への集中力を高めることや遅刻者の減少、学力向上が主眼の場合も少なくは無い。しかし短い時間であっても、文字を読むことが日常化することによって読書が特別な行為ではなくなり、本に親しむ気持ちも育まれるだろう。朝読書に対する評価は賛否両論あるが、少なくとも本に親しむ入り口として十分な効果を持っていると思う。

子どもの読書離れが言われて久しいが、子ども図書館に勤務していると、そうした流れはあまり感じられない。新聞の切抜きを片手に本を探しにくる保護者の方や、重くてカウンターに載せられないほどの本を抱えてくる子どもに出会うことも日常茶飯事だ。

折々、小中学校の先生方にお話を伺う機会があるが、子どもの読書量は二極化する傾向にあるという。1年に1冊読むか読まないかの子どもと、本を読むことが日常の子どもと。いまは活字を追うよりも派手で楽しいことが身近に溢れているが、そうした刹那的な享楽にふける前に、図書館や学校や保護者が、読書の愉楽を知る機会を子ども達に提供できればと思う。

そうはいつても、学校図書館や市町村公民館図書館の資料費は年々圧縮され、購入も思うに任せないのが実情だ。この子どもの本展示会で使用した本は、終了後300冊ずつのコンテナに

詰めなおし、市町村または公民館図書館での移動展示用として発送する。今年度は5月から県内 21 会場を巡回し、11 月に図書館に戻ってくる。その頃には次年度の展示会準備も整ってい

る。今後の「子どもの本展示会」も、各会場を訪れてくださった方々にとって新たな本と出会う場となるよう努めてゆきたい。

(ほらぐち・くにこ)

図書館親子ツアー報告

宮城県図書館企画協力班 田代 恭子

1 はじめに

図書館親子ツアーは、「親子いっしょに図書館たんけん」をキャッチコピーとして、普段利用する中では見ることができない図書館の裏側（閉架書庫や職員の働く姿）を紹介するものです。子どもたちに図書館に対する興味をもってもらい、今後の利用につなげることをねらいとしています。参加対象を子どもに絞り込んだツアーは、前年度に引き続き2回目となります。今回は、小学校1年生～3年生とその保護者10組を対象として、平成20年8月6日（水）と8月9日（土）の2回実施しました。

2 内容

ツアーの実施時間は、子どもが無理なく楽しんでツアーに参加できるよう、各日60分程度としました。限られた時間の中で、子どもに「驚き」「楽しさ」「興味」を味わってもらうにはどのような構成にすればよいか考え、次のような進行としました。

◆集合・諸注意

参加者には、まずホール養賢堂（2階）に集合してもらいました。そこで、諸注意として「急がなくてもいいから、ゆっくりついでくること」「大きな声で話しながら歩かないこと」「体調が悪かったりトイレに行きたい時はすぐ声掛けしてもらおうこと」の3点をお願いしました。参加定員は各日10組、子どもと保護者が一人ずつとしても最低20人のツアーになります。他の利用者への配慮と、なにより参加者の状態に気を配ることを心掛けました。

◆ツアー開始

①3階閉架書庫～いろいろな時代の資料～

まずは、主に9類（文学）の本が置いてある書庫に案内しました。ここでは、図書館には新しい本だけではなく古い本も収集し、保存していることを紹介する目的をもっていました。が、「ショハンボン」（初版本）「ナツメソウセキ」（夏目漱石）といった専門用語、あるいは著名な作家名を出して説明しても、子

もにとってはピンとこないだろうと考えました。そこで、「みんな（子ども）が生まれた頃の本」（おおむね平成12年前後、『ハリーポッターと秘密の部屋』（J.K.ローリング/作 松岡 佑子/訳 静山社 2000）など）、「みんなのお父さんお母さんが生まれた頃の本」（昭和40～50年代、『1973年のピンボール』（村上春樹/著 講談社 1980）など）、「みんなのおじいちゃんおばあちゃんが生まれた頃の本」（昭和20年代、『小山内薫』（久保 栄/著 文芸春秋新社、1947）など）、もっと古い本（大正、明治期の本）という時代区分で、あらかじめ本を用意しておきました。新しい本から古い本へとさかのぼって紹介していくと、紙の質や色が変わっていくのがひとめで分かったようで、明治期の本までたどり着くと子どもからは「ボロボロだー」という正直な声もあがり、場の空気も一気に打ち解けました。

②4階閉架書庫～施設設備と職員の仕事～
利用者が普段入ることができるのは3階部分まで、4階は電動書架のスペースとなっています。ボタンを押すと書架が動くのには、子どもから驚きの声があがり、ボタンを押してみたいという希望が続出しました。また、電動書架による資料収容率の拡張や、開閉時の事故防止のための安全停止バーの説明には、保護者が深くうなずいていました。

もうひとつ、子どもの目をくぎ付けにしたものが、館内の各階に資料を運ぶための自動搬送機です。4階の書庫から3階、2階のカウンターへと、利用者の求めに応じて資料を

効率的に届けるための仕組みに、子どもたちは興味津々の様子でした。

各階へ資料を運ぶのは自動搬送機でも、書架から資料を一点一点取りだすのは職員による作業です。多い時では一日に300点を取りだすこともあります。さらに、書庫では壊れてしまった資料の修理も行っていることなど、普段利用者からは見えづらい図書館の“裏側”の仕事を紹介しました。



③4階閉架書庫～いろいろな形態の資料～

4階でも、資料紹介のコーナーを設けました。着目したのは、「ひとめで違いがわかる」資料の形態です。大型本や豆本、扇型の本（『にじをみつけたあひるのダック』（フランセス・バリー || 作 おびか/ゆうこ || 訳 主婦の友社 2004）、音が出る本（『だんまりこおろぎ』（エリック=カール/作 工藤 直子/訳 偕成社 1997）などを手にとってもらうと、繰り返しページをめくる子どもや黙って資料に見入る子どもなど、自分なりの楽しみ方で資料に向き合っている様子が印象的でした。

◆ツアー終了、アンケート記入

ツアーを通して紹介できたのは、図書館のほんのわずかな部分です。それでも、参加者は自分なりの図書館の魅力を見つけ、感想を

寄せてくれました。

・大きい本がかりれるなんて思いませんでした。すごく小さな本がちゃんと絵や字がかいてるとはびっくりです。これからもおし事ががんばってください。

・電気で動く本だながあるなんて、びっくりしました。

・としよかんのうらがわにいっぱい本が置いてあってびっくりしたのでおもしろかったです。

・幼い頃に読んだ本が今もあるというのにおどろきました。書店に無い本でも、保存してあって、なつかしく感じました。

・電動書庫にビックリしました。昔からの貴重な本をいつまでも利用できるように、私達も借りた本を大切に扱い、返却するよう心掛けたいと思いました。

・1時間が早いと思う程、興味深かったです。



(たしろ・きょうこ)

仙台藩校養賢堂の和算書と洋学書—平成 20 年度特別展事業報告—

宮城県図書館調査班 熊谷 慎一郎

1 はじめに

2008 年は和算家ⁱである関孝和の没後 300 年にあたる年であった。そして同時に、戸板保佑生誕 300 年の年でもあった。

この記念年にあたり、宮城県図書館では、「和算」というテーマの下、東北大学附属図書館と合同で企画展「関孝和没後 300 年記念はっぴい さんぽう—和算の世界へようこそ!—」(会期: 2008 年 10 月 25 日~11 月 24 日)を、さらに当館主催の特別展として「仙台藩校養賢堂の和算書と洋学書」(会期: 2008 年 12 月 6 日~2009 年 2 月 27 日)をいずれも

当館展示室において開催したⁱⁱ。

本稿は、特別展「仙台藩校養賢堂の和算書と洋学書」についての報告である。以降、特に必要がある場合を除いて「本展示」と表記している。

2 展示構成

いささか逆説的ではあるが、図書館で資料を展示することは、ガラスケースの中に資料を配置し、読者が自由にテキストを読むことができない場を作り出すことでもある。従っ

て、当然のことながら、図書館で資料を展示する場合には、博物館や美術館でのそれと異なり、一つひとつの資料から読みとれる情報ではなく、複数の資料が群として存在することによって読みとれる情報をいかにして提示するか、ということ意識する必要がある。

本特別展では、「仙台藩校養賢堂の和算書と洋学書」というタイトルを掲げている。展示配列のため、「第1部 仙台藩校・養賢堂」、「第2部 仙台における和算―戸板保佑と関算四伝書」、「第3部 仙台における洋学―養賢堂と大槻一族」の3つのセクションに分け、科学史の視点から仙台藩の知へ迫ろうという意図をもって展示構成を展開していった。

第1部では養賢堂の蔵書を中心に、養賢堂を描き、第2部では、養賢堂の大きな特色である和算資料について、『関算四伝書』を通じて我が国の科学技術の一端を明らかにし、第3部では、養賢堂にまつわる人物をもって養賢堂を描き出すことを試みている。これらが有機的に結びつき、仙台藩の知のありようを浮かび上がらせることを狙いとした。

3 展示資料外観

以下、各セクションの展示資料およびその背景を概述する。

3.1 仙台藩校養賢堂（第1部）

仙台藩の知について検討をすすめる場合、藩校養賢堂のありように触れない訳にはいか

ない。創立時はともかく、大槻平泉が学頭をつとめた時期に、養賢堂はその規模を大きくし、全国有数の規模を持つ藩校となった。当時の状況を示す絵図が残っている（『仙台府学養賢堂図（側面図）』）。

明治14年に宮城県図書館の前身である宮城書籍館が創設された際、蔵書の基になったのは養賢堂の蔵書と公共図書館の祖といわれる公開文庫「青柳文庫」の蔵書であった。さらに、後に触れるが、明治期に活躍する人物を多数輩出していることもあわせて鑑みると、知の集積地としての養賢堂が存在していたことが見えてくる。

養賢堂の蔵書は幕末期には約1万5千冊に上ることが確認されているⁱⁱⁱ。明治維新後の散逸、第二次世界大戦の戦火による焼失により、蔵書の大半を失い、現在は「養賢堂文庫」として196部727冊の和書および67部1008冊の漢籍が別置されている^{iv}。

現在に伝わる「養賢堂文庫」の特徴として、誰しもが和書の約7割が和算書であることを指摘する。宮城県図書館に所蔵される和算資料の大部分はこの養賢堂文庫に収められているものである。養賢堂の蔵書に和算書が多く認められるにはいくつかの理由があり、その大きなものは、養賢堂で正式な科目として「算法」がおかれていたことによるものであろう。これは養賢堂の大きな特徴の一つといえる。和算書については、刊写を問わず存在しているが、写本の方が比率としては高い^v。

第1部で展示した和算書関係資料はすべて

養賢堂文庫から選出した『算法童子問』など広く流通し読まれていたと考えられる和算の入門書や、仙台藩出身の船山輔之による『絵本工夫之錦』などに加え、『鈎股百好』や『鈎股百五十好』などの問題集を展示した。戸板保佑『関流算術綱領伝』は和算関係資料であるが、戸板自身による学問に関する知見がうかがえる章があり、仙台藩における知のありようを探る一つの重要な資料といえよう。

再確認するまでもなく、養賢堂は藩校である。藩校の目的は藩士子弟の教育であることから、為政者として必要な知見を得るためのカリキュラムが生まれ、その中心は四書五経の素読であった。これは概ねどの全国各地の藩校で見られた傾向であり、養賢堂もその例外ではなかった。

さらにもう1点養賢堂をとおして知のありようを探るために触れておきたい点がある。

先に、養賢堂の特徴の一つに和算の教授を挙げたが、それとは別に、出版事業を挙げることができる。養賢堂による出版物のほとんどは四書五経を中心とした儒学の教科書であった。本展示では、養賢堂版を3点展示し、うち第1部において展示した『訂正四書』および『訂正五経』はこれに該当する。江戸時代後期になると、儒学の教科書以外にも科学技術資料の出版も行っており、第3部で展示した『秒度定刻範』が該当する。

3.2 仙台における和算

戸板保佑と関算四伝書(第2部)

仙台藩の知のありようを探るためのアプローチとして、第1部では養賢堂のありようについて触れた。第2部では、もう一つのアプローチとして、具体的な資料を基に、科学史時代背景や文化、社会、人物などと関連させながら、知のありようを描きたい。

本展示の第2部ではすべての資料を『関算四伝書^{vi}』から選び出している。合同展においても『関算四伝書』を展示した。これは和算史^{vii}の一つの成果として『関算四伝書』を位置づけたものであったが、本展示は和算史を『関算四伝書』に見いだそうという企みがある。

3.2.1 『関算四伝書』

ここで取り上げたのは、戸板保佑による『関算四伝書』である。「関算四伝書」は関孝和の流れをくむ関流の和算家による著作を一同に集めた叢書である。「関算前伝」「関算後伝」「関算要伝」「関算完伝」という4つの区分から構成されており、総称して『関算四伝書』の名称が与えられている。ここに収められた和算書は全511冊に上り、その資料数から我が国屈指のコレクションといわれている。本書には保佑自身の著作や中国の算書を写したものの、藤田貞資ら関流の和算家による著作などが含まれており、当然ながら、関孝和の編述といわれる「三部抄」や「七部書」といった著作も含まれている。さらには有馬頼僮の「求滴捷法」のように写本等が確認できず本書にのみ所収されている算書も散見される。

我が国の科学史上において、数学の理論的基礎を築いたのは関孝和であるといつて良いだろう。関の業績は彼の後継者たちに受け継がれ、やがて「関流」という和算最大の流派を生み出すことになる。

編者である戸板保佑は宝永5年(1708)仙台に生まれ、通称名を善太郎、多植、茂蕃などと号した。保佑は中西流算術^{viii}を青木長由に、天文学を遠藤盛俊に学んでいる。後に保佑は仙台藩天文方として、宝暦改暦の事業に参加するため京都へ行き、そこで幕府の天文方として改暦事業に参加していた山路主住と出会い、彼に師事し関流算術を学ぶことになった。この出会いが、『関算四伝書』の編纂へとつながっていく。

『関算四伝書』は、戸板保佑の時代までに存在した関流の著作を集めているだけにとどまらず、中国の算書等も所収しているため、関流を基礎としながらも、そのみに偏ることのない知について知ることができる。

3.2.2 『関算四伝書』各伝と展示配列

本展示では、『関算四伝書』を通じて、和算史を探ろうとするべく、関孝和を師とする門人たちの系統に沿って、資料を配置した。従って、第2部は関孝和の著作(著作とされているものを含む)に始まり、高弟の荒木村英、建部賢弘へ続き、さらに、山路主住、有馬頼僮、戸板保佑らへとつながる流れにそって、著作を配列している。

『関算四伝書』は、「関算前伝」「積算後伝」

「関算要伝」「関算完伝」の4つの区分により構成されているが、本展示ではあえてこの区分を用いなかった。

大きな理由として、『関算四伝書』の区分は戸板の分類による部分が多分にあり、和算史を『関算四伝書』に見いだすという目的のためにはそれを壊す必要があったからである。少なくとも、戸板は、(我々が今日和算史としてとらえている)関流の流れに沿って4つの区分を想定しているのではなく、あくまでも、関流の中心となる理論書、周辺事項として押さえるべき書、初学者が学ぶための書、関孝和以降に発見された理論や知見について書かれている書という区分を与えている。

この4つの区分の意図するところは戸板による各伝の序文に見て取れるので、簡単に紹介しておく。

「関算前伝」の序文には、戸板が京都において山路から伝授された内容を校訂し構成したものであるという主旨が記されている。戸板の著作もこの「関算前伝」に多く所収されているが、序文に書かれているように、自らが関流を学んだ時の「肝要の諸伝」としての位置づけをしていることも理由の一つであろう。関孝和の著作もいくつかここにふくまれている。

「関算後伝」の序文によれば、改暦事業がおわり京都を離れた戸板に山路が送った和算書や天文書をまとめた旨記されている。この後伝には関孝和の著作は含まれておらず、「孫子算経」といった中国算書の写本をはじめ、

叢書類がいくつか所収されている。

「関算要伝」の序文には「初学童蒙の書を輯め」とあるように、初学者に向けた和算書が納められている。関孝和の著作としては「解隠題之法」をはじめ4点収録されている。

「関算完伝」の序文には、関孝和の弟子たち^{ix}の成果を一同に集めまとめた旨記されている。久留米藩主でもあった有馬頼僮ら戸板と同時代に生きた和算家の成果、いわば最先端の研究成果を収めている部分と言ってもよいだろう。

以上のような区分を生かす展示も考えられるだろうが、今回は見送り、和算史を『関算四伝書』に見いだすということを主たる目的とし、各伝の粋を取り払って、資料を選定した。関孝和の著作とされている七部書や三部抄を冒頭に置き、ここを起点に主な弟子たちを順に辿っていくこととした。建部、山路、有馬らを中心に『関算四伝書』から著書を選び、『関算四伝書』に所収されていないものについては、壁面の解説パネルにて紹介した。なお詳細は目録および資料解題を参照願いたい。

繰り返しになるが、第2部では仙台藩における知のありようを探るために、『関算四伝書』を通じて我が国の和算史を描いている。西洋の科学技術の受容が本格的になされるのは、戸板の時代よりもう少し後のことであるが、『関算四伝書』を通じて得られる我が国の数学は、価値を持っていることがわかるだろう^x。

3.3 仙台における洋学

養賢堂と大槻一族（第3部）

知のありようを探るべく、第3部では仙台藩における西洋の知についての受容過程を描きたい。

このことは、仙台という地における江戸時代から明治時代へ、いわゆる近世から近代へという変化の根底にあるものを探り、ひいては日本の近代をとらえるための一つの潮流を探ることになる。

本展示では、そのための方法として、養賢堂に関係の深い大槻一族をとりあげ、仙台藩の知のありようについて見ていくことにしたい。

仙台にかぎらず日本の洋学はオランダからの書物の輸入にきっかけを持たせることができる。仙台でも藩校において蘭学方を設け、洋学研究が行われるようになり、現在でも当館に当時の洋書が残っている^{xi}。今回は、その中から、天文曆書や英蘭辞典を展示した。

また、第1部でも触れた養賢堂出版物のうち、科学技術資料として『秒度定刻範』を展示しているが、これは藩校の出版物としてだけでなく、手のひらにおさまるハンディサイズの書物でもあり、資料の形態としても興味深い資料である。

このように、仙台藩では洋学が盛んに受容されていたが、これは長崎や江戸をはじめ、各地に着々と西洋の知の受容が進みつつあった時代である。このような洋学隆盛の基礎をつくったのが仙台藩にゆかりのある人物では

大槻玄沢をあげることができよう。玄沢は磐井郡（岩手県一関市）の出身で、江戸で杉田玄白、前野良沢らに師事しオランダ語を学び、芝蘭堂を開き学問を教授し、またオランダ語の入門書として『蘭学階梯』を記した。

養賢堂の学制改革に尽力した大槻平泉、習齋について学頭に就任した磐溪は、玄沢の息子である。彼は漢学者であったが、砲術家としての一面も持っており、西洋式の軍艦建設に携わっている。ペリーの来航に磐溪はとても興味を持っており、ペリーの航海誌である『Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan』の翻訳にいち早く手を挙げ『英文翻訳彼理日本紀行』を著した。彼は日本のものであろうと西洋のものであろうと隔てなく興味を持っていたことがわかる。

第3部では、大槻一族を中心に取り上げ、仙台藩の知のありようを描いた。西洋の知というものは、例えば、仙台にのみ局所的なパラダイムシフトをもたらすものではなく、明治以降の近代日本につらなる大きなうねりとなっていることがわかる。それは明治以降に養賢堂から輩出された人物の活躍によっても明らかであろう。

4 おわりに

以上、本展示の概要を述べてきた。少なくとも、当館の展示のうち、これほど大きく『関算四伝書』を取り上げることはなかつただろ

うと思われる。

『関算四伝書』にかぎらず、多くの資料はそれ一つではそこに書かれているテキストから得られる情報以上を語らない。しかし、テキストから得られなくとも、多くの情報を資料は内包している。我々は、資料群として再構成し、配列することによって、テキストから得られる以上の情報を目にすることができる。

本展示では何度も繰り返しているように、各種資料を通じて、仙台藩、あるいは我が国の知のありようにせまろうという試みであったが、多少なりとも、展示を見に来た方々に届いたものと信じている。

ⁱ 「和算」という用語は明治期以降に「洋算」に対応する語として成立したもので、当時は「算」、「算法」などと称し、関連する書物を「算書」、「算法書」などと称していた。本稿では、特に文脈上必要がなければ「和算」、「和算書」という語を用いる。

ⁱⁱ なお、会期中に好評を博したため期間を延長することとし、2009年3月1日までの会期となった。

ⁱⁱⁱ 『養賢堂蔵書目録』による。『養賢堂蔵書目録』は『蔵書目録にみる仙台藩の出版文化』（第3巻 ゆまに書房 2006）に所収。

^{iv} 詳細は『青柳・今泉・大槻・養賢堂文庫和漢書目録』（宮城県図書館 1984.3）を参照。

^v 養賢堂文庫の和算資料群についての概要は、佐藤賢一、養賢堂文庫和算資料について、宮城県図書館貴重資料専門調査事業報告書、平成16年度、宮城県図書館 pp.45-58 を参照。

^{vi} 本書の来歴等については、熊谷慎一郎、関流和算書の集大成：戸板保佑編『関算四伝書』、図書館雑誌、103巻3号（2009.3）も参照。

^{vii} 和算をテーマとした展示において、科学史は自ずと和算史を中心に展開されていくため、本来なら「和算史」は「科学史」の一部であるが、本稿においては特に区別して用いない。

^{viii} このため、戸板保佑を関流の系統ではなく、中西流の系統とする資料もある。例えば、東北歴史資料館編. 算額. 東北歴史資料館、1976 を参照。

^{ix} 序文に名前が挙がっている人物のうち主だったものでは、建部賢弘、荒木村英、中根元圭、山路主任、松永良弼、藤田貞資

らがいる。「関算完伝」に含まれる著書のうち、著者として名前が明記されているのは、有馬頼懂、松永良弼、藤田貞資らである。

^x なお、本節における記述は、佐藤賢一「近世日本数学史と『関算四伝書』」(『関流和算書大成』勉誠出版 2008) に依拠する部分が多い。記して感謝する。

^{xi} 本展示で選定した洋書は伊達文庫所収のものであるが、一部に養賢堂の蔵書印である「仙台府学図書」の印のあるものもある。伊達家と養賢堂の蔵書は非常に近いものであることがうかがえる。

【参考資料1】展示目録

<p>展 示 目 録</p> <p>宮城県図書館移転開館 10 周年記念特別展 叡智の杜から(第1回) — 仙台藩校・養賢堂の和算書と洋学書 —</p> <p>平成 20 年 12 月 6 日(土)～平成 21 年 2 月 27 日(金) (図書館開館日の)午前9時 30 分～午後5時まで 宮城県図書館展示室(2階)</p>

第1部 仙台藩校・養賢堂

	仙台府学養賢堂図(側面図)	写本
大槻平泉	講堂小誌 1冊	写本
小池裕斎	養賢堂諸生鑑 1冊	1872年(明治5)序 稿本
	養賢堂蔵書目録 1冊	写本
	訂正四書	1807年(文化4) 仙台 養賢堂 刊本
田辺楽斎(校)	訂正五経	1808年(文化5) 仙台 養賢堂 刊本
	鈎股百好 1冊	写本
	鈎股百五十好 1冊	写本
山路主住	関流算法草術題目書 5冊	写本
中根彦循	勘者御伽双紙 3巻3冊	1743年(寛保3) 京都 天王寺屋市郎兵衛 刊本
村井中漸	算法童子問 6巻6冊	1784年(天明4) 京都 天王寺屋市郎兵衛 刊本
船山輔之	絵本工夫之錦 3巻3冊	1798年(寛政10) 江戸 須原屋市兵衛等 刊本
藤田貞資(編)	神壁算法 2巻2冊	1789年(寛政元) 京都 水玉堂 刊本
斎藤尚仲	算法初学類題 12冊	写本
戸板保佑	関流算術綱領伝 4巻4冊	写本

第2部 仙台における和算—戸板保佑と関算四伝書

関孝和	解見題之法 1冊	(関算前伝 93)
関孝和	解隠題之法 1冊	(関算要伝 69)
関孝和	解伏題之法 1冊	(関算前伝 2)
関孝和	開方翻変 1冊	(関算前伝 90)
関孝和	題術弁議之法 1冊	(関算前伝 94)
関孝和	病題明致之法 1冊	(関算前伝 95)
関孝和	方陣之法 1冊	(関算前伝 30)
関孝和	算脱之法・験符之法 1冊	(関算前伝 29)
関孝和	求積 2冊	(関算前伝 83-84)
関孝和	毬欠変形草 1冊	(関算前伝 89)
関孝和		
建部賢弘	大成算経 20冊	(関算後伝 35-54)
建部賢明		
建部賢弘	綴術 1冊	(関算前伝 176)
久留島義太	久氏遺稿 1冊	(関算後伝 32)
山路主住	弧背詳解 1冊	(関算前伝 171)
山路主住	角法大意伝 2冊	(関算前伝 132-133)

有馬頼徳	求積起率 1冊	(関算完伝 11)
戸板保佑	買合変数伝 1冊	(関算前伝 78)
戸板保佑	生剋因法之伝 1冊	(関算前伝 3)
戸板保佑	側円伝 1冊	(関算前伝 85)
方中通	数度衍 8冊	(関算要伝 107-114)

第3部 仙台における洋学—養賢堂と大槻一族

大槻玄沢	蘭学階梯 2巻2冊	1788年(天明8) 江戸 群玉堂松本善兵衛 刊
la Lande Bastiaan, Strabbe	Astronomia of sterrekunde	Amstrdam : Jan Morterre, 1773-1780
Halma, François	Le grand dictionnaire françois & flamand, 3 druk	Utrecht : Jacques van Poolsum, 1779
Sewel, William	A large dictionary, English and Dutch, in two parts	Amsterdam : Steven Swart, 1708
Tatischeff	Dictionnaire Complet Francoiz Et Russue Composè	St. petersbourg, 1798
村田明哲	秒度定刻範 1冊	1858年(安政5)序 仙台 仙台藩養賢堂 刊
東東来(画)	平泉先生御真影	
大槻磐溪	洋兵教練小隊図式 1冊	1856年(安政3) 写本
大槻磐溪(著) 大槻如電 大槻文彦(編)	寧静閣四集 4巻4冊	1908年(明治41) 活版
M. C. Perry	Narrative of the expedition of an American squadron to the China seas and Japan	New York, 1857
M.C.Perry(著) オフィス宮崎 (訳)	ペリー艦隊日本遠征記 3冊	1997年(平成9) 栄光教育文化研究所
M.C.Perry(著) 手塚節藏 工藤岩次(訳) 大槻磐溪(校)	英文翻訳彼理日本紀行 10巻10冊	1863年(文久3)跋 写本
大槻玄幹	西韻府 1冊	1833年(天保4) 江戸 須原屋伊八等 刊本
大槻文彦	言海	1891年(明治24) 自筆稿本
矢野成文(編)	幼稚園保母及母親の心得 8冊	1894年(明治27) 写本

平成20年12月6日
 編集:宮城県図書館資料奉仕部
 発行:宮城県図書館
 仙台市泉区紫山1-1-1
 TEL 022-377-8441(代表)
 FAX 022-377-8484

挨拶

宮城県図書館長 伊達宗弘

養賢堂は、全国屈指の藩校として最先端の学問を教授し、多彩な人材を輩出しました。

明治初期文部官僚であった旧佐賀藩主鍋島直正は三百諸藩の教科を調べ、仙台藩だけが唯一和算を正規の科目として教えていたと驚嘆しています。

戸板保佑は、すべての和算書を集大成し、現在でも和算が盛んな仙台・一関地域に多大な影響を与えました。さらに、仙台藩は和算だけではなく蘭学・ロシア語も教えた数少ない藩であることも注目しておくべきでしょう。

また、養賢堂を語るとき忘れられないのは、大槻玄沢ら大槻一族の果たした役割です。彼らは全国レベルで活躍し、仙台藩の学問の振興にも大きく貢献しました。仙台藩には、明治以降の多彩な人材を輩出する基盤が形成されていたことをうかがい知ることができます。

平成 20 年 12 月

養賢堂の創設

18 世紀は全国各地に藩校が設立された時期です。仙台藩においても、1736 年(元文元)、高橋玉斎(たかはしぎよくさい)の建議により学問所が創設されました。

しかし創設からわずか十数年後には、度々講義が中止されるほどに、学問所は衰え、これを憂えた7代藩主伊達重村(だてしげむら)は、1760 年(宝暦10)に学問所を、通学に便利な北一番丁勾当台通に移転します。

さらに重村は自ら書いた「養賢堂」の扁額を学問所に授け、1772 年(安永元)から、学問所を「養賢堂」と称するようになりました。

養賢堂の学制改革

1810 年(文化 7)に第4代学頭に大槻平泉(おおつきへいせん)が任命されます。平泉は養賢堂の興隆のために学制改革にのりだします。

新田開発による年貢収入を学校運営費にあて、校舎を拡張するなど設備面の充実をはかっていきます。

養賢堂は現在の宮城県庁舎のあるあたりにありました。

養賢堂は戦災で焼失しましたが、明治初期に移築された表門が仙台市若林区にある泰心院に山門として残っています。



養賢堂の特色

養賢堂における教育は、文武両道を修めさせることを目的としていました。

当初の学科は、朱子学や算術、剣術・柔術などでした。大槻習斎(おおつきしゅうさい)が学頭をつとめていた頃、ロシア語や造船などの科目も加えられます。

試験は、春と秋に2回行われ、また年1回卒業試験である「改め」がありました。

全国の藩校と比べ特筆すべきは、算術も正式に教授されていたことがあげられます。

養賢堂の出版

養賢堂は本の出版も行っていました。

養賢堂の敷地内に設けられた「御蔵板摺所(ごぞうはんすりしょ)」で印刷され、主に生徒のための教科書類が出版されています。これらの出版物は総称して「養賢堂板」といわれています。

養賢堂では、四書五経などの儒学の教本が多く出版されました。これらは後に、許可を得た城下の書肆(しょし、本の出版や販売をする店)からも広く刊行、販売されるようになり、仙台の印刷、出版に大きな影響を及ぼしました。



養賢堂文庫

藩校養賢堂では、1779年(安永8)に書庫を設けて以来多くの書物を収蔵していました。

養賢堂の書籍を調査した際に記録された『養賢堂蔵書目録』によると、蔵書数は1万5千冊余に上ります。

明治維新後の散逸、第二次世界大戦の戦火による焼失などを経て、蔵書の大半を失いましたが、現在は196部727冊の和書と、67部1008冊の漢籍が、養賢堂文庫として宮城県図書館に伝えられています。

蔵書のうち、約7割を和算書が占めています。

第2部

和算の発展

和算は江戸時代に日本で独自に発展した数学です。そろばんや九九を中心に暮らしの技術に大きく寄与し、また遊びの一つとして楽しむものでもありました。

17世紀後半、関孝和(せき・たかかず、1640?~1708)により体系化された和算は、以降江戸時代を通じて大きく発展していきます。江戸や上方では、和算家同士の議論が盛んに行われ、その成果は仙台の地へも届きます。

関孝和は数多くの重要な発見をし、和算の理論的基礎を築きました。関の業績は彼の後継者たちにより受け継がれ、「関流」という和算最大の流派が成立します。

関流和算書の集大成—関算四伝書—

関孝和以降の関流和算家たちの著作などが所収されている資料が現在に伝わっています。

その資料は「関算四伝書(せきさんしでんしょ)」と呼ばれており、仙台藩の天文学者として名高い戸板保佑(といた・やすすけ、1708~1784)が編纂をしました。

「関算前伝」「関算後伝」「関算要伝」「関算完伝」という4つの区分からなり、その膨大な資料数から我が国の和算史上屈指のコレクションといわれています。現存する507冊が宮城県有形文化財(書跡・典籍)に指定されています。

このコーナーでは、「関算四伝書」から我が国の和算をたどっていきます。

関流をたどる

■算聖・関孝和

関孝和は最も有名な和算家といえますが、その生涯は謎に包まれています。正確な生年は不明で、いつ頃どこで和算の研究を行っていたかについても詳しいことは分かっていません。生前出版した本は『発微算法(はつびさんぼう)』の1点のみで、その他の著書は関の没後、彼の弟子たちによって編纂されたものです。

関は数学史に残る数多くの重要な発見をし、「算聖」と称されています。

関が残した業績は、その後継者たちによって受け継がれていきます。

■荒木村英

関孝和の高弟である荒木村英(あらかむらひで、

1640~1713)は、

関の遺稿を
まとめ『括要
算法』を出版しました。



■建部賢弘

同じく高弟の建部賢弘(たけべ・かたひろ、1664~1739)は、日本初の円周率を表す公式「円理」を発見しています。

■久留島義太、松永良弼

久留島義太(くろしま・よしひろ、?~1757)は独学で大成した和算家です。荒木村英に学んだ松永良弼(まつなが・よしすけ、?~1744)と親交がありました。彼らは前述した建部の発見した「円理」をさらに発展させていきます。

■山路主住

山路主住(やまじ・ぬしずみ、1704~1772)は、上述の久留島・松永の流れをくみ、円弧に関する研究などを行い、後進を育てることに尽力し「関流」の免許制を確立しました。

■有馬頼僮

有馬頼僮(ありま・よりゆき、1714~1783)は久留米藩主でしたが、数学に長けており、山路主住に学んでいます。

一般に和算家は師から免許皆伝を受ける制度にあったため内容については秘伝とされ、公刊することはありませんでした。

ところが、有馬はこれを破り『拾璣算法(しゅうき



さんぼう)』を公刊します。以降多くの和算書が刊行される契機となりました。

「関算四伝書」もこうした流れの中で和算書を収集し編纂されたと考えられます。

「関算四伝書」の視点

戸板保佑は最初に青木長由(あおき・ながゆき、1669～1740)に中西流の和算を、後に京都で山路主住に師事し、関流の和算を学んでいます。

「関算四伝書」には関流を中心にさまざまな和算書を収録していますが、中には中国の数学書も収録されています。ここで紹介している「数度衍(すうどえん)」は中国に滞在していたイエズス会宣教師に学んだ方中通(ほう・ちゅうつう、1634～1698)の著書です。西洋幾何学を取り扱った内容が記されている書です。

このように、「関算四伝書」に収録された資料をみていくと、戸板は和算のみならず中国や西洋の数学などへも広く関心を有していたと考えられます。

洋学(蘭学)の興り

徳川吉宗の代に学術書など一部の外国書の輸入が解禁されたことにより日本に蘭学が興ります。

仙台藩では、養賢堂蘭学方(らんがくかた)を中心に、大槻平泉(おおつき・へいせん)・習齋(しゅうさい)両学頭の指導を受けてめざましい発展をみせます。後の学都仙台はそれらの学問をもとに形成されていきました。

養賢堂には外国書も所蔵されており、多くは蘭書(らんしょ、オランダの書物)ですが、英語・仏語・独語などの洋書もあります。さらに物理や造船などに関するロシア語の書物も含まれています。これは「魯西亜学和解方(ろしあがくわけかた)」でロシア学が講じられていたためで他の藩校には見られない特色です。

大槻平泉

大槻平泉(1773～1850)は、磐井郡山目村(現在の岩手県一関市)に生まれ、江戸の官学「昌平坂学問所」に入門し、のち舎長となりました。

藩の命令で養賢堂の学制を研究し、翌1810年(文化7)に学制18か条を起案します。これに基づく養賢堂改革の功績が認められ、同年第4代学頭に命ぜられ、以降40年間その職をつとめました。

新田を開発し年貢収入を中心に学校運営費にあてるなど独立採算制による学校運営を行い、一方では蘭学方を設置しオランダ書の翻訳と講義を実施するなど広く世界に目を向けた教育を行いました。

大槻習齋

大槻習齋(1811～1865)は大槻平泉の長男として生まれ、「昌平坂学問所」に入門し、漢詩・漢学を学びました。

1850年(嘉永3)、父平泉の跡を継いで養賢堂第5代学頭となり、洋学研究・教育拡充をはかりました。緊迫する当時の国際情勢の見地から医学館に蘭学局を設け、ロシア語を講じる洋学科を新設します。

1857年(安政4)、松島湾寒風沢(さふさわ)に「仙台造船所」を設け、日本最初の西洋式軍艦「開成丸」を造船させ、翌年7月に13代藩主慶邦の臨席で進水式を行いました。当時、洋式造船技術は、仙台・水戸・薩摩の三藩にしかありませんでした。

大槻磐溪

大槻磐溪(おつき・ばんけい、1801～1878)は、大槻玄沢の二男として生まれ「昌平坂学問所」に入門します。32歳の時に仙台藩から学問稽古人を申し付けられて漢学に専念することになります。この後、磐溪は漢学者・漢詩文の大家として名を世に顕しました。

その一方、西洋砲術を学び仙台藩より西洋砲術稽古人という肩書きも与えられています。

1865年(慶応元)、65歳の時養賢堂の学頭に就任しましたが、翌年病気を理由に職を辞しました。

養賢堂と大槻一族

養賢堂は数多くの優秀な人材を輩出しています。明治期に各界で活躍した人物としては、初代仙台市長を務めた遠藤庸治(えんどう・ようじ)、財団法人斎藤報恩会を設立した斎藤善右衛門(さいとう・ぜんえもん)、幼稚園創設に尽力した矢野成文(やの・なりあや)などが挙げられます。

また養賢堂学頭を務めた大槻一族は、明治以降の日本の近代化にあたって重要な役割を果たしました。

大槻玄沢は杉田玄白、前野良沢に学び日本の洋学発展の基礎を築き、孫の文彦(ふみひこ、磐溪の二男)は、本格的な近代国語辞書『言海』を編纂しました。

【参考資料3】資料解題

以下は展示資料のキャプションに掲載した資料解題をそのまま収録したもので、解題を付していない資料もある。

第1部 仙台藩校・養賢堂

	仙台府学養賢堂図 (側面図)	写本
		写本
大槻平泉	講堂小誌 1冊	大槻平泉が養賢堂の大講堂の建設などについてまとめたもの。
小池裕斎	養賢堂諸生鑑 1冊	明治5年(1872)序 稿本 養賢堂は大槻平泉が学頭をつとめた時期に校舎の大幅な拡張が行われました。正式な数値は未詳ですが、幕末期には1000人以上が学んでいたともいわれています。

		写本
	養賢堂蔵書目録 1冊	1835年(天保6)に養賢堂の書籍を調査したときの目録です。当時の蔵書数は全体でおおよそ1000部、冊数にして1万5千冊余にのぼりました。和算に関する資料は当時から数多く所蔵されていたことがわかります。
	訂正四書	文化4年(1807) 仙台 養賢堂 刊本 「四書」は「論語」「大学」「中庸」「孟子」の総称です。朱子学の祖、朱子はこれら4点の書を最初に読むべき書とし、注釈書を著しました。
田辺楽斎(校)	訂正五経	文化5年(1808) 仙台 養賢堂 刊本 五経は「周易」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」の総称で、儒学の基本書とされています。校閲した田辺楽斎は養賢堂の学頭をつとめた人物です。 『訂正四書』と同じく、儒学の教科書として、養賢堂から出版されたものです。
	鈎股百好 1冊	写本
	鈎股百五十好 1冊	写本 「鈎股」は「直角三角形」、「好」は「問題」を意味します。これらは直角三角形に関する問題集です。当時から「三平方の定理」が知られていました。
山路主路	関流算法草術題目書 5冊	写本 関孝和に始まる関流和算の問題集です。養賢堂にはこのような問題集が数多く所蔵されていました。
中根彦循	勘者御伽双紙 3巻3冊	寛保3年(1743) 京都 天王寺屋市郎兵衛 刊本 本書は、関流を学んだ中根が自らの知識を一般の人々にわかりやすい形で著したものです。

村井中漸	算法童子問 6巻6冊	<p>天明4年(1784) 京都 天王寺屋市郎兵衛 刊本</p> <p>本書は『勘者御伽双紙』の続編として書かれた内容となっています。著者の村井は中根彦循の弟子にあたります。</p>
船山輔之	絵本工夫之錦 3巻3冊	<p>寛政10年(1798) 江戸 須原屋市兵衛等 刊本</p> <p>船山は仙台藩士で、戸板保佑に学びました。初学者向けの問題集で、問題編と解答編が別々に出版されています。</p>
藤田貞資(編)	神壁算法 2巻2冊	<p>寛政元年(1789) 京都 水玉堂 刊本</p> <p>寺社に奉納された算額(和算の問題や解答を絵馬に書いて奉納したもの)を集めて収録したものです。後年収録数を増やした改訂版が出版されました。</p>
斎藤尚仲	算法初学類題 12冊	<p>写本</p> <p>斎藤は最上流の和算家です。仙台では関孝和の流れをくむ関流が多数でしたが、養賢堂には、関流以外の和算書も所蔵されていました。</p>
戸板保佑	関流算術綱領伝 4巻4冊	<p>写本</p> <p>全4巻からなる問題集です。第1巻には関流算術の要点とともに、問題を解く際の心構えが記されています。「他の流派の優れた所は受け入れる」という内容の記述から戸板の学問観をうかがい知ることができます。</p>
第2部 仙台における和算—戸板保佑と関算四伝書		
関孝和	解見題之法 1冊	<p>(関算前伝93)</p> <p>「解見題之法」、「解隠題之法」、「解伏題之法」の3編を総称して「三部抄」と呼ばれています。解見題之法では方程式を傍書法(ぼうしょほう、</p>

			筆算のこと)により解く方法が書かれています。
			(関算要伝 69)
関孝和	解隠題之法	1冊	未知数が一つの方程式の解法を中心に論じた書。「三部抄」はそれぞれ方程式に関する書です。
			(関算前伝 2)
関孝和	解伏題之法	1冊	未知数が複数ある方程式を、行列式を用いることにより解く方法が書かれています。ヨーロッパではライプニッツが 1693 年に初めて用いたとされますが、日本では関がこれより 10 年以上先立つこととなります。
			(関算前伝 90)
関孝和	開方翻変	1冊	不定方程式の解法に関する理論書。
			(関算前伝 94)
関孝和	題術弁議之法	1冊	関以前には誤った問題（解のない問題など）や間違った解法が多く流通していました。これらを分析し論じたのが本書です。
			(関算前伝 95)
関孝和	病題明致之法	1冊	病題とは誤りのある問題のこと。「題術弁議之法」では病題を分析しましたが、本書「病題明致之法」では、これらの誤った問題、適切でない問題の訂正について論じています。
			(関算前伝 30)
関孝和	方陣之法	1冊	方陣・円陣（いわゆる魔方陣）の理論書です。格数（マスの数）により奇数と偶数にわけて作り方を述べています。
			(関算前伝 29)
関孝和	算脱之法・験符之法	1冊	剰余定理に関する理論。「算脱」とは和算の問題で有名な「ままこだて」のことを意味し、これの数学的解法が示されています。
			(関算前伝 83-84)
関孝和	求積	2冊	図形や立体の面積や体積を求める理論書。

関孝和	毬欠変形草 1冊	<p>(関算前伝 89)</p> <p>毬欠は球を削ったものを指します。球体を削った立体の体積に関する理論書。</p> <p>「開法翻変」からこの「毬欠変形草」までの7編を総称して「七部書」と一般に呼ばれています。</p>
関孝和	大成算経 20冊	<p>(関算後伝 35-54)</p> <p>関の理論を体系化した書。20巻にわたる大著ですが、編集は建部賢弘が、校訂は兄の賢明が行いました。「関算四伝書」に所収されている「大成算経」は20巻目が欠落しています。</p>
建部賢弘	建部綴術 1冊	<p>(関算前伝 176)</p> <p>円周率に関する書。建部はここで「円理」と呼ばれる円周率を求める公式を明らかにしました。</p>
久留島義太	久氏遺稿 1冊	<p>(関算後伝 32)</p> <p>久留島は天才と称されながら、まとまった著作を残さずにいました。また、自身で書いた草稿類にあまり気を配らなかったようです。「久氏遺稿」は久留島義太の遺稿を集めたとされる書です。</p>
山路主路	弧背詳解 1冊	<p>(関算前伝 171)</p> <p>円弧（円周の一部）に関する理論書。</p>
山路主路	角法大意伝 2冊	<p>(関算前伝 132-133)</p> <p>正多角形に内接する円や外接する円を取り上げ、その半径や対角線などの関係を論じた書。山路の角法に関する業績は関算四伝書に多く残されており、ここから彼の業績が明らかになりました。</p>
有馬頼僮	求積起率 1冊	<p>(関算完伝 11)</p> <p>さまざまな図形や立体の面積、体積を求める方</p>

			法を論じた書です。
戸板保佑	買合変数伝 1冊	(関算前伝 78)	不定方程式の解法を扱っています。数種類の品物（ここでは瓜と茄子と桃）の買い方と購入代金に例えて解説しています。
戸板保佑	生剋因法之伝 1冊	(関算前伝 3)	戸板が、関孝和「解伏題之法」について詳しい解説をしている書です。生剋はプラスとマイナスを意味します。
戸板保佑	側円伝 1冊	(関算前伝 85)	楕円に関する問題の解き方を扱った書です。「側円」は円柱を斜めに切ったときの切り口の事です。
方中通	数度衍 8冊	(関算要伝 107-114)	「関算四伝書」のうち唯一の漢籍刊本。

(くまがい・しんいちろう)

図書館における博物館型展示の実施について

宮城県図書館企画協力班 日野 文都

●はじめに

当館2階には約300㎡ほどの広さの展示室がある。団地間と呼ばれるサイズの畳に換算すると、144畳ほどになる。そして当館では3階に高校生以上を対象とした資料を配置している。こうした構造上の制約もあり、当館「展示室」での「展示」は、多くの図書館で実施しているような資料の貸出を直接的な目的とした展示よりも博物館や美術館で行われるような展示に近

いものとなっている。本稿では、博物館・美術館等で行われる展示と、図書館で行う展示についての違い、また図書館で博物館型の展示を行う際の留意点について、実際の展示企画（2009年3月からの展示）を例に紹介する。

●博物館型の展示、図書館型の展示

博物館や美術館で行う「展示」とは、何らかのテーマを設定し、そのテーマに基づいた資料

(各館で所蔵しているものが中心になることが多い)を集め、人々に「見せる」ことである。その目的はテーマとして取り上げた何らかの概念や情報を伝え、理解してもらうことであり、展示の冒頭にはその展示の目指すところ、この展示で何をいいたいのかが明示され、資料の横には解説が付される場合が多い。

一方、図書館における「展示」は、何らかのテーマを設定し、そのテーマに基づいた資料を集めるところまでは博物館や美術館と変わらないが、その先が違う。見せるだけでなく、貸出に供するという行為が加わることが多い。図書館で「展示」を行う目的は、資料の利用を拡大することであり、特に貸出数を増やすことに力点がおかれる。従って、どのような資料を集めたのかを簡単に記した掲示物(ポスター、チラシ、ポップなど)が展示場所に付されることはあるが、「展示」を行う目的や、資料の解説などが掲示されることは少ない。

簡単にいうと、博物館や美術館では、テーマを理解してもらうために実物その他の資料を見て(ときには体験して)もらうことが「展示」であり、図書館ではテーマを理解してもらうために資料を借りて読んでもらうことを「展示」と呼んでいる(違う呼び方をする図書館もある)。

●博物館型展示に必要なこと

両者の「展示」には次のような違いもある。博物館型の「展示」は同時に複数で享受することが可能であるが、図書館型の「展示」は厳密には同時に複数で享受することは不可能である。

似たような内容を持つ違う図書資料を借りることは可能であるが、それらは同じ資料ではない。

現在でも図書館資料の大半を占めるのは文字によって情報を記した「図書資料」であるが、これらの図書資料は目で「読む」という形で利用されることを想定してつくられている。この目で「読む」という体験は個人作業であり、1冊の図書資料をその形態を保ったまま、複数の人間が同時に目で「読む」ことはほぼ不可能に近い。一方、1つの博物資料なり、美術資料なりを複数の人間が同時に「見る」ことは可能である。たとえば、1つの壺を5人で同時に見ることは可能であるが、1冊の図書資料を、5人同時に目で読むことはまず不可能である。従って、図書館で博物館型の展示を行いたいのであれば、概念や情報を同時に複数で享受できる形に変換して提示することが欠かせない。一方でその提示内容は、「盛り込みすぎない」(参考資料①p150)ことが大事である。

●なぜ博物館型展示を行うのか

同じ「展示」という言葉を用いていても、このような違いはあるが、貸出を目的とする図書館型の展示が行える場合はあまり悩む必要はない。問題は、貸出の場と展示の場がとても離れている場合や、博物館や美術館にあるような立派なガラスケース付きの広い展示室がある場合である。このような場合の選択肢は三つ考えられる。①博物館型展示にする②貸しギャラリーにする③他の用途へ転用する、の3点である。当館では①博物館型展示にする、という形を

2009年現在は採用しているが、博物館型展示を行う場合に気をつけなければならないことがある。それは、図書館は博物館や美術館ではない、ということだ。図書館の本来業務は情報そのものの加工ではなく、加工された情報または加工された情報へ至る手助けをすることである。図書館型展示はこの存在理由に合致しているので、実施にあたっての疑義が生じることは少ない。しかし博物館型展示をそのまま図書館で実施しようとするとうるような疑義が館の内外から生じる。例えば、図書館型展示に比べて博物館型展示ははるかに時間も人手も金もかかるが、それだけの投資に効果が得られるのか、博物館型展示を行うことで何をを目指すのか、これらへの答えを保留したまま、たまたま博物館型展示ができるような環境や資料があるから、というだけの理由で博物館型展示を実施すると、館内での了解も展示企画へのモチベーションも得られないまま、担当にとってはただ苦行に満ちた業務と化してしまう。なんのために博物館型展示を行うのか、という実施効果を考えた上で、個々の展示の目的をその都度設定する必要がある。もし、そうした効果や目的が設定できないのであれば、(設定しても効果が得られないのであれば)②や③のような選択も考えるべきであろう。

● 3つの目的を設定する

博物館型展示を行う際には、次の3つの目的を明確にしたい。1 博物館型展示を実施する狙い・見込まれる効果 2 今回の展示の趣旨・何を目的とするのか 3 今回の展示の目的の到達点・

利用者には何をもち帰ってもらうか、の3点である。これらは、図書館で博物館型展示をする目的、今回の展示の目的、今回の展示で少なくともこれだけは利用者に理解してほしい目的とそれぞれ言い換えることができる。

1 博物館型展示を実施する狙い・見込まれる効果については、すべての博物館型展示の背景にあるものなので、実施を決めた際に明示してしまうのが一番手っ取り早い。決めてしまえば、後はそれに基づいてそれぞれの展示を実施することができる。ちなみに当館では、「宮城県図書館へ興味関心をもってもらうため、宮城県図書館をアピールするための広報事業の一環として博物館型展示を行うこと」と位置付けている。

2 今回の展示の趣旨・何を目的とするかであるが、今回は実施時期が3月から5月と先に決定していたので、この時期に必要となるもので、1の条件をも満たすことができるものと考えた。3月から5月は、年度末や年度始、ゴールデンウィークがあり、新しい場所への移動や新しい場所での行動が増える時期である。そこで地図をとりあげることとした。当館には大変貴重な17世紀の世界地図を所蔵しているほか、古絵図の修復事業も行っているので、地図をテーマにすればこれらの紹介もでき、1の条件を満たすことができる。「世界をとらえる方法としての地図の変遷を追いかけながら、同時に宮城県図書館の所蔵資料、目的についても知ってもらうこと」を目指した。

3 今回の展示の目的の到達点・利用者には何をもち帰ってもらうか、というのは、博物館型

の展示をすることで何を理解してもらいたいのか、これだけは少なくともわかった、と思っ
てもらいたいことを何にするのか、である。今回は「実生活で実際に地図を使いこなすための知識を知る」とし、簡単な体験コーナーを作り、
利用者が参加しながら使いこなすための技術について学べるようにした。

●よりよい展示実施のために

以上のような目的を設定した上で、展示に取り掛かるわけだが、どれだけ良い内容を選んだとしても、わかりやすく表現され、それが利用者に理解されなければ、展示としての完成度は低い。また、施設内の他のサービスとの連携も考えたい。このようなことを含め、よりよい展示を実施するためには、①複数の人員で取り組

む②実施結果の蓄積とフィードバックの2点が欠かせない。特に見やすさといったデザイン的な側面は、蓄積されることで洗練していく傾向があるようだ。

博物館型展示は時間も人手も費用もそれなりに必要とするが、目標を定めて取り組めば利用者からのダイレクトな反応が得られる業務でもある。本稿が図書館での「展示」実施について考える際の参考になれば幸いである。

参考資料

①『博物館を見せる』K. マックリーン著 井島真知・芦谷美奈子訳 玉川大学出版会 2003

②『スミソニアンは何を展示してきたか』A. ヘンダーソン/A. L. ケブラー編 松本永寿・小浜清子訳 玉川大学出版会 2003

(ひの・あやこ)

叡智の杜（第6号）

発行日：平成 21 年 3 月

編集・発行：宮城県図書館

〒981-3205

宮城県仙台市泉区紫山 1-1-1

TEL 022-377-8441（代表）

FAX 022-377-8484

URL <http://www.library.pref.miyagi.jp/>

※表紙／図 本館所蔵『環海異聞』

（初めて世界一周した日本人の見聞録）

大槻茂質・志村弘強／著 写本 15 巻首 1 巻 宮城県指定有形文化財